
ないうちにお姫様のヒーローになる約束を交わしていたようです。～ところで僕が神にも悪魔に

H@S E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら僕は僕の記憶のないうちにお姫様のヒーローになる約束を交わしていたようです。〜ところで僕が神にも悪魔にもなりえるって本当？〜

【Nコード】

N8716Q

【作者名】

H@SE

【あらすじ】

僕の名前は美菜^{みなのひいろ}乃緋色、いたって普通の高校2年生だ。

身長は170弱、体重50半ば、握力は30をギリギリ超えるか超えないかほどしかない。

成績も運動神経も髪の長さもみんな中途半端で、とりえといえるものはパツとは思いつかない。

——って思っていたんだけど、なんか僕にはすごい力が秘められて

いるようで——それなんてラノベ？

天使と墮天使、わりとめっちゃくちな小説ここにあり。

創造と解放

「おかーさん、あのね、あのね。」

ノイズ交じりに聞こえてくる声。懐かしい。

「僕ね、ヒーローになるんだ。」

ああ、そういえばそんなことを小学校の作文に書いていたっけ？

「そうね、あの子と決めたんだ！」

あの子——いつも聞くけれど、いったい誰なんだい？

「あのね——」

だけど、それ以上を聞くことも言うこともかなわない。

ドガシャン！

「——っててて……。」

背中に受けた衝撃で目が覚めた。ああ、またあの事件の時の夢か。

——もう10年も前になるのか。

20××年5月13日のことだ。

僕は、両親と幼馴染の道標みちしるべと一緒にどこかへ出かけた。

その日の帰りに、僕は誰かに何かをされた。

気がつけばそこには、血まみれになって横たわる幼馴染と、僕らを何かからかばうようにして死んでいた両親の姿。そして、血の海で横たわっていたのは、標だけじゃない。僕も同じように、そこに横たわっていた。

その間の記憶と、その日のそれまでの記憶が丸々抜け落ちた。覚えているのは、誰かとその日に約束をしたということだけ。だれと、なにを約束したのか、思い出せない。

おかげで僕は、いつまでたっても約束を果たせない。それどころか、相手の顔すら覚えていない。

だけどその約束は、子供らしく、それでいて大事な――そんな気がする。

「――目覚めは最悪だな……。」

ベッドから盛大に落ちて、その衝撃で背中を強打し、痛い。

時計はまだ目覚ましがなる時刻より30分ほど早い6時ちよつと前を指していた。

「……二度寝できるほどの時間はないよなあ……。」

仕方なく、起きることにする。

木曜日 いたって普通に今日も学校はある。

高校2年の初夏、いやな夢とともに、今日の学校の準備をする。

僕の名前は美菜乃緋色^{みなのひいろ}、いたって普通の高校2年生だ。

身長は170弱、体重50半ば、握力は30をギリギリ超えるか超えないかほどしかない。

成績も運動神経も髪の長さもみんな中途半端で、とりえといえるものはパツとは思いつかない。

昨日ダイエーで買っておいた総菜パンをほおばりながら、適当にテレビをつけてニュースを眺める。画面斜め左上の天気予報が、今日の晴れを予想した。時計が指し示す時刻は未だ6・13分、標との待ち合わせまではまだ30分以上ある。

「ふああ……。」

呑気な欠伸が出えてしまう。ニュースは正直聞こえてこない。聞いていない。時計代わりに使っているようなものだ。

また今日もあまりいいニュースは流れない。まったく、物騒な世の中だ。

「眠いなあ……。」

適当に入れた牛乳を嘔みながら飲む。あ、この牛乳賞味期限今日だ。

「あー……今日の昼飯何にしようかな……。」

弁当を作ってもいいのだが、昨日は体育があって疲れていて、本当なら今日は目覚ましギリギリまで寝ているつもりだったから、ご飯を炊いていない。

適当に学食でも行くか。そう結論付けた。

のろのろと着替えながら、今日の授業はなんだったかなと思います。うわ、一時間目から数学だよ。あの先生いい人だけど授業がつまらないんだよなあ。

なんてね。

かなりゆっくり着替えたつもりだったが、時計は未だ6・31分を指す。後20分弱ほどは余裕がある。

「んー……じゃあ、そうだな……。」

何をしようか少し考えて、いつもより少し早いがもうこれをしておこうと決めた。

「今日も頑張るよ、父さん、母さん。」

チーン

鈴をならし、仏壇の前で手を合わせる。小さい時両親が死んでからの日課だ。いつもなら学校に行く直前にするのだが、今日は時間がありあまりすぎた。

「たまには早く行って標を驚かしてみようかな？」

あまり堂々と言えないことだが、普段学校へは標と一緒に登校しているのだが、その待ち合わせに僕が先に着くことはめったにない。

「たまには、僕が待つ側になろう。」

友達との待ち合わせなどなら、僕は比較的早くから待っている方だが、標より早くに待っていることは、やっぱりめったにない。

これは雨が降るか？

考えて、少し悲しくなる。

「あれ？ 今日はいねー。」

待ち合わせ場所に着いてからそれほど待たずに、標がやってきた。時計を見ると、6・40分、待ち合わせに僕が指定した時間は7・00。いつもこんなに早くから待っていたのか？ 別に急かせば僕だってこんなにゆっくり行動しないのに。

「うん。ちよつといやな夢を見てね。」

「また、あの事件の？」

そう言って標は、自分の頭にそつと手を当てた。

あのときの事件で彼女は頭——こめかみの辺りだったかな？——に大けがを負い、その傷跡を隠すように、夏だろうと関係なく常にニット帽をかぶっている。事情を話しているので、学校の先生も公認だ。ニット帽から、彼女の本来の長い茶髪が顔を見せる。

頭に手を添える彼女の顔は、やはりあまりいい顔をしない。僕だって、あれは思い出したくない——わけではないが、目の前で両親が死んでいたんだ、できればやはり、思い出したくないものではない。

「うん……。そ、それよりさ、せっかく早く集まったし、たまには刀の所に行ってみない？」

「あ、いいね。」

刀とは、この町の神社の娘だ。

美琴刀、僕らと同年で、大体僕より全部上の小学生のころからの幼馴染——小3からの友人を幼馴染に数えていいならだが——で、巫女（もどき）だ。僕が彼女に勝ると言えば、身長が3センチ高いことか？

本人は剣道だと言って木刀をよく素振りしているが、かなり独自の解釈をしているのか、いろいろと知らなかったりする、いわば素人だ。それでも彼女ほど運動神経がよいと、「面！」と言いながら思いつき相手の頭をたたきだけでそれなりにさまになるから不思議だ。もし彼女と剣道の試合をしたら、たいてい相手が（刀の自覚なしルール違反で）勝つだろう。が、それが喧嘩ならまず間違いない。彼女が勝つだろう。少なくとも僕は彼女に勝てたためしがない。試合以外で。

「この時間なら、彼女、もしかしたらまた素ぶっていたりしてね。」

「はは、そうかもね。」

ぶんぶんと素振り（剣道というよりは野球のそれに近いかもしれない）をしている彼女の姿を想像して、笑いをこらえずにはいられない。

——なんて言っている間に、その神社に到着。階段を上り、鳥居をくぐる。予想通りにぶんぶんと音がする。今日も本気振りだな。

「おっおっおい。」

「む？」

標の呼びかけ（？）に反応して、刀は素振りをやめる。ちなみに今日のそれは完全に野球選手のそれだった。あぶな。

「標に緋色か。珍しいな、こんな朝早くにこんなところに来るなんて。」

「いや、それよりも、さ。」

今彼女は、青を基調とした巫女服姿である。現在時刻は6…56分。割とギリギリである。

「——間に合うの？」

「——？ うわっ！？ もうこんな時刻か！！ 少し待っていてくれ、すぐ用意する。」

男勝りというか、侍もどきというか、妙な男口調（素である）の刀が全力疾走で母屋へと駆けていく。黒髪のロングなサイドテールがそれについて行くかのようになびく。

「ほんと、元気だよね。」

「僕はついていけないよ。」

正直、彼女の生活を僕がしろと言われたら、一瞬で断れる自信がある。

別段巫女として特別なことをしているわけではないらしいが、とにかく本人が気まぐれに毎日素振りなんかしているんだ。僕が同じことをすれば、次の日にはまず間違いない筋肉痛だろう。

「待たせた。では行こうぞ。」
相変らず早い。女の子つてもっと用意に時間かけるようなもんじゃないの？ とはあえて言わない。

「ぎりぎりせえふ！」

いつも乗る電車が発車する寸前で僕は電車に飛び乗った。駆け込み乗車はご遠慮ください。僕がいえることじゃないけれど。
さあここからが長い。学校に着くまで、あと1時間は使うだろう。
まあ、のんびり揺られれば、すぐなだけだね。

電車を乗り換えてからの記憶はあいまいだ。僕はどうやら、電車の中で熟睡していたらしい。いびきが聞こえなかったかと少し不安になったが、別にそんなことはなかったらしい。

校門の目の前の急な坂をてこてこ歩きながら、最近買ったラノベの話の二人にする。飛び出す絵本から本当に少女がとび出た話だ。短編だと思って買ったら続きものだったから、なんとも金銭的にきつい勘違いをしたと後悔した。話がよかったから続きが気になるのに買えないというのは嫌いなのだ。

時刻は8…15分、朝のHRまで、まだ35分もある。あ、漢字のプリントやってない。急いで朝にやろう。

あ、プリント忘れた。

ま、ノートでもちぎってそれに書けばいいか。

どうってことない一日がその日も過ぎた。

目の前で電車が出ていったせいで次の電車を待つはめになったが、別にだからと問題ではない。急いで帰る理由なんてない。どうせ家に帰っても一人なんだから。

——ちなみに、僕は10年前のあの日以来、母さんの母さん——つまりお婆ちゃん——と暮らしているのだが、何分、かなり若いころに僕のお母さんを生んだらしく、しかも本人がかなり若い（見た目的にも性格的なにも）ため、僕が高校1年に挙がったとたん『わたしは旅行に行くわ!』と、ギリギリ50代のお婆ちゃんがどこかへと消えて、それ以来僕は一人暮らしだ。——

どうってことない一日がその日も過ぎた。

——と思っていたんだけどなあ。

6..17

学校に5時くらいまで残っていたから、駅に着いたらこんな時間になっちゃった。

「（家に着いたら6..はん30くらいかな?）」
なんて。

——家に着いて、見慣れないものが玄関前（外）にしている時間で、本当に今日も平和に終わるものだと思ひもなかったのだが。

「なんだこれ?」

それはダンボール。いや、見ただけでそれは分かる。問題は、これの中見なわけで。

がっちりとかムテープで封をされていて、側面には『割レ物注意』と。そして差出人不明。なにせ、差出人が判るようなものが一切ないのだから。普通こういう荷物って、相手先（この場合、僕の家）の住所とか書いた紙が張っているだろうけれど、どうにもそういうタイプのものはない。はられていた形跡もない。ただ一枚、ひっそりと『緋色殿へ』と書かれた小さな紙がムテープ本体を重しにそこにおいていた。察するに、この荷物はここでムテープの封がされたのだろう。

——本当に何だろうか？　できれば面倒事じゃないといいけれど。と、僕のラノベ脳がいらないフラグを立ててしまった。しまった。

よたよたとおぼつかない足取りで、それを家の中へと持ち帰る。

本当、中身が食器とかならまだいいんだけどね。一人暮らしだからそんなに食器入らないけれど。と、なぜか中身は食器じゃないこと前提で物事を考えだしている。おい僕のラノベ脳、それ以上変なフラグは立てないでくれ。

よたよたと居間の方へ荷物を運ぶ。割レ物注意となれば、進む足も慎重になるといふものだ。いてつ、肘打った。

——いたっ？ あれ、僕、こんなに声高くないよ？

恐る恐るダンボールを見下ろす。――まさかねえ。

きつと今の声は僕の幻聴。それはそれでひどいが、差出人不明の荷物の中身が人であることよりずっとましだと思う。

ようやく、居間にたどり着く。

さっきのは幻聴さっきのは幻聴さっきのは幻聴さ
 きのは幻聴さっきのは幻聴さっきのは幻聴さ
 は幻聴さっきのは幻聴さっきのはg(r y)。

言い聞かせるように僕はつぶやく。

ビリビリビリッ！！
力任せにガムテープを引きちぎる。粘着力高
いよコレ。

そして、
だ。

いやな予想は大的中。何このラノベ的展開。

ガムテープを引きちぎると同時、ダンボールから女の子がものすごい勢いで飛びついてきた。が、どうやら僕の位置が悪かったのか——悪いのはある意味僕の運だろうけれど——思いつきり頭をぶつける。

二人同時に同じような体制でうずくまり額に手を当てる。ファーストコンタクトがこれとは、つくづくラノベ展開をどうもありがとう。望んでないけれど。

「痛いじゃないのヒロー!!」

ん? この子今なんてった?

真っ先に普通こういうことは夢だと思うだろうけれど、あいにく夢じゃないと思えないほどの痛みをファーストコンタクトで味わっているから、諦めてラノベ展開を楽しむことにする。——じゃなく、今この子、僕の名前を呼んだ?

「——誰?」

金髪碧眼、いかにもな外国人美少女相手に、これまたいたって普通な対応を。もしかしてストーカーかなんか? とも思ったが、こんな美少女相手に付け回されるような生活はしていない。

「誰って……アタシを覚えていないのですか!??」

「へ?」

まるで「覚えていたと思っていたのに!」と言わんばかりに彼女は声を荒げる。

「アタシよ、デュナメスⅡノーブル・ヴァーチェスよ!」

と、デュナメスⅡノーブル・ヴァーチェスさんが声を荒げる。いや、そんな大層な名前の知り合いは思い当たりません。

「10年前の契りを果たしにに來たのに!」

10年前? ——ああ、嫌な思い出がよみがえる。

「——10年前の、いつ?」

「5月13日ですわ。」

——ああ、その日なのねやっぱり。

「——本当に、覚えていらっしやらないのですか?」

「……残念ながらね、僕の知り合いの中にデュナメスさんだなんて大層な名前の人物はいないよ。覚えてる範囲では、ね。」

あの事件の日、僕は標と両親と共に襲われた。その日のことは覚えていないと言っても差し違えがない。

覚えているのは、誰かと何かを約束したということ。

『10年前の契りを果たしに来ました!』

彼女の言葉は真剣そのもの。

もしかして、彼女が?

「――その日のことを、教えてくれないか? 5月の、13日のことを。」

僕は、聞くことにした。だって知っているんだろう? これは当然の選択だと、僕は思う。

彼女も、それに答えてくれた。

「――えーと、つまり――」

彼女の話をもとめると、こんなところだろうか。

僕は彼女のヒーローになる。

当時6歳(僕は1月生まれ、早生まれだ。)の僕は、彼女と『約束』をかわしたらしい。ヒーローということは、さしずめ彼女はお姫様か? そう解釈すると、彼女の服装――短いスカートにノーズリーブで背中が丸だし――というのも、いささか不釣り合いといえるかなんというか。

しかし、あまり詳しく話してくれない。

「そこから先は、自力で思い出してほしいというのが乙女心ですわ。」らしい。

そして、

「僕は、人間?」

「ええ、たぶん。」

多分かい。

というのも、彼女によると僕はとんでもない力を持った『アトム』なる存在らしい。鉄腕? いいや違う、詳しくは知らないが、彼女曰く『エジプト神話に出てくる天地創造の神の名前』らしい。

そのとんでもない力こそ、『創造』、大雑把に言えば『思い通りに

ものを生み出す力』らしい。思い通りに、どこのハ○ヒだよ。

さらにさらに、僕は完全無意識化でその力に強制をかけているらしく（それも何重に）、普段の生活に影響はないんだとか。

つまり、もし仮にその強制が解除されれば、僕は人の言うところの『神』にも『悪魔』にもなるとか。

——夢だな。これはさすがに夢だな。如何に僕がラノベ脳で心の広い若者でも、さすがにそれは信じたくない。

でも、ラノベだときこういふときってたいい相手の眼は本気だろ？

悔しいね、彼女の眼も本気と書いてマヂと読みそうなくらいに本^マ気^デだった。

その時に「厨二病乙」と鼻で笑ってやれば僕は平和だったのだろうか？ とにかく僕は、この馬鹿らしいことを真実として受け入れることにしてみた。

「あなたが狙われたのは、その力を恐れた墮^{ルシフェル}天使によるもの。彼は、アタシたちの中で最底辺であると同時に最高位なの。」

「アタシたち？」

「アタシたちは、天使や悪魔、神、その他それに通じる類義語を使って階級を現すの。アタシの場合、名前はデユナメス、つまり力^{第五}天使^位だけれど、本当の階級はスローネ、つまり座^{第三位}天使に値する存在よ。」

りきてんしがざてんしでなんだって？

「つまり、アタシはかなり高位の存在ってこと。」

「なるほろ。」

でもまだ、『たち』の部分について説明してもらっていない。彼女たちは、階級を持っていると言うけれど、『たち』って誰？

「ああ、あたしの職場の上司とか部下のこと。」

その説明の瞬間、狙ったかのように家の壁が爆発した。修理費がえらいことになる！——じゃなくって、何者だ！？

『見つけた。アトム。』

そこには、小さな白い翼を背中につけていることと手に弓を持って

いること以外は特別不思議なことの無い美少女が一人。標と同じく
らいの濃さの茶髪だろうか？ あ、瞳が翡翠色だ。

「でたわね墮天使！」

どうやら、彼女の仕事仲間らしい。事が穏便にすむとは思えないが。

『アトム。排除。』

どこか無機質無表情な相手の墮天使さんは、デュナメスを無視して
自分の翼から羽根を一枚むしり、それを弓に構えた。するとどうだ
ろう、羽根は見る見るうちに鋭い矢となった。うわ、僕を狙ってい
る。

『排除。』

もう一度彼女は言うのと、矢を持つその手を話した。その時だ。

「無視すんなごるあああああっ！」

強烈なデュナメスの頭突きが相手の墮天使をぐらつかせる。こら、
そんなはしたない言葉を使わない。

どうしてこうも僕は余裕を持てるのだろうか。分からないけれど、
解らないことは分からないことのせいにしておけ。というわけで、
僕が余裕を持っているのはきっと僕の『アトム』の力のおかげだろ
う。強制？ ^{リミッター}細かいことはいいんだよ。今だけは。

その間にも、彼女たちは激しい攻防をして——いなかった。

圧倒的な攻め。どっちがって？ 位の高いほうがだよ。

『排除。排除。排除。』

「そんなんじゃないわよ狩人、^{アポロン}て言うか、あんたそんなしや
べり方じゃないでしょ？」

『……排除、排除！』

一瞬だけ感情を見せたかのように思えたが、その表情は一瞬で戻り、
また弓を撃つ作業に戻る。普通ではありえない速度で放たれている
矢だったが、それはデュナメスにかすりもしない。ちなみに僕には
見えもしない。

「そおい！」

そのうちの一本を、デュナメスが刃の部分をやけるようにつかみ、

投げ返した。なんつー荒技。

だがそれは確かに狩人^{アポロン}と呼ばれた堕天使の羽根に命中させ、血が流れる。

『ギッ……。』

まるで油が切れた人形のように、『ギギギ』とか『ガガガ』とかいった擬音が似合いそうな感じに僕の方を睨んできた。

『――排除お！』

一気に、10本近く矢が放たれた――と思う。あのね、肉眼であれを捕えろとか無理。

「！ ヒイロ！」

「え？」

ドスドスドス。

一瞬、何が起きたか分からなかった。理解するのに1秒以上使い、理解したくないということを理解するのに、また1秒近く使った。デュナメスが、僕をかばったらしい。

背中には、10本（本当に10本だった）の矢が突き刺さり、かばったその時の姿のまま、力なく腰を抜かして動けない僕の胸元に倒れ込む。

――フラッシュバック――

ああ、あの時と同じ、あのときの事件と、同じ。僕は、誰かにかばわれて、かばった人は、死んで――死ん、で……。

死――なせない。

ぷつんと、何かが切れるような音が聞こえた気がした。

続いて、パキン、と、鎖がちぎれるような音がした気がした。

体中に力がみなぎる。もう、腰も動く。

「ひ……ヒイロ……？」

「死なさない。」

ゆっくり、驚愕の顔をした彼女を床に寝かせる。当然、矢が刺さっている方を上に向けて――つまり仰向けに――だ。

『――は、排除！』

一瞬ためらった狩人は、しかし排除対象の僕めがけて矢を放つ。
今度は、見える。

頭では理解できないが、心や体はすでに理解している。

『創造』の強制を解除。

デュナメスは『いくつも』と言っていたから、きつとまだまだ本調子ではないんだろう。それでも結構だ。見えるならそれで、

「問題ない。」

さっきデュナメスがやったように、とんできた矢を素手でつかむ。
なるほど、これはすごい。

それを、同じくデュナメスがやったように相手の翼めがけて投げつける。

『……!』

かわせずにそれを翼で受けとめた狩人もまた、驚愕、といった顔で僕を見つめる。いや、睨む、の方が適当か。

『……っ！ 排除おお!』

今までで一番感情のこもった顔だ。だが、そんな彼女の一撃も、今の僕にはどうってことない。

ひらりとかわし、『創造』の力を右手に集中させる。話を聞く限りではあらゆる物を生み出せるらしいが、あいにく、パツと思いつくかぶような物はなかった。だから、それを『力』として『生み出す』。

だん、と、畳の床を蹴り、相手に接近する。

相手は少女、顔面を殴るのはかわいそうな気がした。

だから僕は、思いつき顔面を殴ることにした。

なんでって？ かわいそうと思うことが間違いだからだ。

メリオっ、と、おおよそ人体から発することはないであろう音とともに、彼女は吹っ飛んだ。倒れた彼女の身体から、何やら黒い影の様なものが浮かび上がる。

「それが、彼女を変えていたもの。」

「デュナメス!？」

背後には、倒れていたはずのデユナメスが。

「ちよーっと痛かったけれど、ま、たかだか階級天使下位には負けないわよ。」

見ると、さっきまで倒れていたところには血痕と引き抜かれた矢が。そうだ、背中はい？

「大丈夫、これくらい平気だって。」

そう言って、彼女は背中を見せた。肌が露出しているそこには、傷痕はほとんどない。

「こう見えて、アタシ丈夫なのよ？ ある程度の再生能力もあるし、あたしの階級の座天使スローネって、形ある天使の中では最高位だって言われているしね。」

「そっか、よかった……。」

座天使がどうのこうのというのは、僕にはわからないが、とにかく彼女は無事だった、そういうことだろう。

「それにしても、あれだけ頑丈な強制解除リミッターしちゃうなんてね。まあ、まだ一つ目なんだけどね。」

あ、やっぱりまだ解除は幾つも残っているんだ。でもそもそもどうやってこの力が解放されたのか、今一理解していないんだけど僕と、

「うう……。」

のそりと、狩人アポロンが立ち上がろうとした。アイツまだ立てるのか！？ 拳にさっきと同じように力をためてみる。と、

「ストップヒイロ、ここはアタシが。」

そう言って、デユナメスは狩人アポロンに歩いて近づいて行った。そして、

「大丈夫？ アンジェラ。」

「でゆ、でゆなめす様あ……。」

泣きながら、さっきの弓矢墮天使は座天使だか力天使だかよくわからないデユナメスの胸元に泣きながら飛び込んだ。

……えー、どういうこと？ ですか？ どうか、僕に分かりやすい

ように説明をお願いします。
緋色は心の中で、そう嘆いた。

日本刀と拳銃

「本当に、申し訳ありませんでした。」

どうしてこうなった。

僕の目の前には、まさしく土下座ポーズの弓矢墮天使ことアンジェラさんが。

どうしてこうなった。

どうやら、彼女たちの話を分かりやすく言うと、

「彼女はルシフェルによって操られていただけで、あの性格はその影響で、ほんとはいたってまじめな天使で、あたしの部下で友人。ちなみに能力は狩人アポロンで階級は権天使アルケイ、結構下の方ね。」とはデュナメス談。

「うう、確かに私はあなたを襲いました。そのことは反省します。でも、普通女性の顔を殴りますかあ!？」とは、顔を主に鼻血による物理的理由で顔を真っ赤に染めているアンジェラ談。「ごめんなさい。」これ僕談。

それにしても、人(というか天使)すら操れるとは、さすが最底辺ながら最高位の墮天使ルシフェル、やることがハンパじゃない。

「私以外にも、たくさんの人が彼の手によって『墮天』しています。」

どうやら、あの時昇って行った黒い影は、ルシフェルの影響による力だったらしい。

要は戦って勝てと。

戦って、勝てと。

……。

か、勝てるの？ 僕。そのルシフェルとか言うのに。最高位で最底辺なんだろう？

と、ふと、自分の言葉のおかしさに気付く。

最高位で最底辺？ それって、全くの矛盾じゃないか。

「なあデュナメス。」

「なあにヒイロ。」

デュナメスの横で『デュナメス様を呼び捨てにするな!』とか言っているアンジェラが。妬いているのか?

「ちよっと思っただけどき、ルシフェルの階級、最高位で最底辺って、日本語としてはものすごく矛盾していないか?」

「ああ、そのことね。確かに、矛盾しているわ。」

でもね。と、デュナメスは続ける。
「そう現すのが一番正しいのよ。何せ彼は、実力に関しては、本当にアタシたちのだれも敵わないって言っても過言ではないほどに強い。」

アンジェラがつけたす。

「あの男の能力は破滅、その力は、大自然の秩序も乱すと言われています。」

具体的には、彼の気紛れでハワイのキラウエア火山すら噴火させられるのだとか。すごい。

「——そんなのに僕は命狙われているの!?!」

はと気付く衝撃の事実。あれ? 僕絶体絶命?

「そうなるけれど、そうはさせません!」

力強いいったのは、デュナメスだ。

「アタシだって、ちよっと特別な力を持つ天使ですもの、墮天使ごと気に後れは取りませんわよ!」

なんと心強いことだろう。

そして、なんと自分が頼りないことだろう。10年前に勇者の契りをかわしたと言うが、どう考えても勇者とは僕のことである。なのに、このままでは僕は守るべきはずの存在に助けもらう側になる。これは、早いうちに強制の解除ができるようにならないとな。僕は、そう強く思った。

——その前に……。

「どーしようかね、これ……。」

僕はまず、この家にぽっかり空いたこの穴をどうにかしないといけない。もうアンジェラさんったら、玄関から入ることはできないの！？

と、少々おぼさん口調になるくらいどうしたものか。

「お任せください！ デュナメス様の部下として、この穴は、わたしたちがすぐに修理いたしますので！」

割と大きい胸（C→D？）を張り、「お任せください！」と、どん、と叩く。直後にむせていたけれど。

「あ、じゃあおねがい。」

出来れば、彼女が来る前に――

だがその願いは、とどかなかった。

「緋色く、何このあ……な……？」

「あ。」

間に合わなかった。ご近所さんこと道標さんの登場である。彼女は『ピシッ』とか『ピキッ』とかいった音が似合いそうなほど見事に固まっている。まあ、普段一人の男の家にいきなりでっかい穴があいていて、おまけに中に見知らぬ女性2人とくれば、幼馴染としてはだまっていられないのは分かる。

「あ、あ………標？」

幸いなのは、この3人の格好はみないたって健全な格好なためラノベ的お決まりシーンになる可能性が限りなく低いことである。

具体的には暴力表現的な意味で。おそらく、標が本気で僕を殴っても、そんな過度な表現にはならないだろう。たぶん。きつと。おそらく。だからって殴ったりしないでね！

「緋色……ラノベのお決まりな展開になってほしくなかったら、今すぐこの二人のことを説明してね。拒否権はないよ。」

「わ、わかっているってば。」

だから、さ、そんな恐い顔しないで。いやもうマジで。

「……ふうん、標ちゃん、ねえ……。」

その彼女の顔を、デュナメスはじっと見つめていた。そのことに気づいているのは、アンジェラしかない。

金曜日、華金だよ華金。

空は晴れ晴れ5月晴れ、気温もちょうどいい感じ。

まさに「いい日」なのだが――

「……眠い。」

というよりも、寝ていない。

なぜって？ 理由は二つあるんだ。

一つは、「やっぱり、背中に羽が生えたのがいっぱい外にいと、いろいろと問題になると思うので、夜のうちに仕事をさせてもらいますね！」

と、多分悪気のないアンジェラとその仲間たち。そのみんながみんな、背中に羽が生えている女性である。

女性しかいないのか？ とも思ったが、確かルシフェルはアンジェラに『彼』って言われていたからそんなことはないだろう。とおもい、思い切ってアンジェラに聞いたところ、

「わたしたちの男女比率は大体7…3くらいの割合で女性が占めていますね。実際、私たちの舞台は女性アマゾンネスだけですし。」とのこと。

――話がずれたが、要は一晩中作業の音が聞こえてきていたわけ（外に音が漏れないように防音効果のある結界の様なものをはってはいたらしいが、その中にいる僕には関係ないことだった）、それがまず一つ。

もうひとつは――

「どうしてもこうなった？」

別に狭い部屋ではない。穴があいたとはいえ、幸い、吹っ飛んだ部屋はない（水道管とかもやられてはいなかった）。のに、

なんで――僕の真隣にデユナメスさんがいらっしゃるのでしょうか？ 居間で寝ていたはずでは？

ああ、ラノベ展開は免れないのか？ 男としてはうれしむべきなのだろうが、寝ている女の子というのは、健康男子高校生（高2）に

は刺激が強い。

とりあえず、起こさないように布団から出る。うん、なかなか器用なことだよねこれ。だって僕、壁とデユナメスとに挟まれるように寝ていたんだよ？ あ、そのガ○ダム好きそうなのこの君、デユナメスってそのデユナメスと違うからね。もしそうだったら僕死んでいるからね？

——とにかく、朝食を。今日はちゃんと弁当も朝食も作るかな。昨日あんなに激しい運動（言い方に難あり）をしたっていうのに、特に疲れは見当たらない。これが創造^{アトム}の力？
なんて考えながら居間に行く——

「あ、おはよう、緋色。」

「おはようございます、アトムさん。」
思わずこけそうになる。

なして僕の家で標とアンジェラが仲良く茶をすすっているの？！ アンジェラなんか、何か知らないうちに煎餅パリパリ食べているし。

——なんてツツコみを入れようかと思ったけれど、中央のちゃぶ台に置いてある4人分の朝食を見て、その朝食から香る凄まじくおいしそうな匂いで、その気も失せた。ぐぎゅうう。あ、腹の音が。

「凄まじく分かりやすい感情表現ですね。」

なんか、いろいろな感情が混じっているようで実はたんにバカにしているだけの様な顔のアンジェラが鼻で笑う。

「わっかなりやすいねーほんと。」

標まで笑うなよ。ぐぎゅうう。はい、2回目。

「デユナメス様が起きてきたら、朝食にいたしましょう。」

「あ、じゃあ、僕が起こしてくるよ。」

ぐぎゅうう、と、本日3回目の腹の虫を早く抑えるために、彼女を起こしに僕の部屋へと起こしに行く。
と、

「ところで、ここに敷いてある布団って、デユナメスさんのだよな

」?」

「標?」

「な〜んで緋色は、自分の部屋に向かっているのかな?」

何となく、そう、何となくだが、今標の顔を見るのはものすごく怖い。別にやましいことなんてな〜んにもしていないのだから、僕は恐れる必要はないのだが、だがしかし、何でかな〜、怖い。

ああ、暴力幼馴染にしりに敷かれているラノベ主人公はこんな気持ちかなのかな? 標の場合、そう簡単に手を出してきたりしないからそこら辺は安心だが、いざというときの彼女の強さはハンパじゃないから怖い。

「あゝ、これはですね〜?」

だから、やましいことなんてないのに何でこんな言い訳じみた切り出し方をするのかなあ僕。
がちやり。

「おはよーヒイロー。あ、アンジェラも標ちゃんもおはよー。」
『……。』

3人が、僕の部屋から出てきたデュナメスを見て凍りつく。
あれ、おかしいな、2人分の殺気を感じる? おいおい標、いつからそんな殺気を放てるようになったんだ? それだとまさしく『暴力系ツンデレ幼馴染』だぞ。単語3つ繋げて、そのうち前二つはお前に当てはまってないぞ?

「――アンジェラさん。」

サー・イエッサ
「了解。」

ちよ、弓と矢を構えないでほしいな? ボクワルイコジャナイヨ? ぷすり。思い届かず、浅くもささる。もし僕が一つも創造アトムの強制リミッターを解除をしてなかったら確実に貫かれていましたよ!?

「あー……なるほどね、ごめんねヒイロー、これって、間違いなくアタシの責任だよね?」

ああ、デュナメス、君が物分かりのいい人（正確には天使）で助かるよ。でも僕だって、ここで「はいそうですね」とは言うまい。

「……。」僕は黙ることにした。察してくれ。

「――とりあえず、朝食覚めちゃうからしゃしゃつと食べよつか。」

最初に口を開いたのは、標だった。あ、何かいろいろ察したって顔している。

「そうしましょうか。」「そうですね。」「うん、そうだね。」三者三様、僕らはそれぞれ口を開く。ぐぎゅう、あ、今日4回目。そういうわけで、とりあえず僕らは朝食（白飯と出し巻き卵とみそ汁の和食3点セット。塩鮭が恋しい）を食べることに。

ふと、時計に目をやる。なんだ、まだ7時にもなってないんだ。いつも学校には30分近くの余裕を持ってついているから、これくらい、どうってことはない。

「そういえばデユナメス、こっち側の戦力って、どれくらい？」疑問に思っていた。

相手は人（というより天使）を自分の操り人形にできるのだから、そうとう戦力はあるはずだ。質も量も。

「うーん、どれくらい、て聞かれると答えにくいわね。もともとルシフェルのことを快く思っていた天使なんてほとんどいなかったわけだし、そういう意味では天使のほぼみんなが味方、なんだけれど、みんながみんな無事だとは正直思えないし……何人かは、多分人の身体を借りているから探すのも大変だし。」

「人の身体を？」

「そう。ゆうたいりだつ？ うん、なんか違うけどそんな感じ。」なんでまた、そんなことをする必要があるのだろうか。

僕のそんな意志を呼んだのかと思えるほどのタイミングで、アンジエラが続ける。

「いわゆる『変装』みたいなものですよ。一般人の身体を借りれば、当然、見た目はその人のそれに変わりますよね？ そうすれば、ルシフェルに見つかるまでの時間稼ぎができるのですよ。――もつとも、こんなふうには人の意思に直接干渉できる天使自体が少ないので

すがね。私たちにはできない芸当です。」

なるほど、何となくはわかった。

「じゃあ、ルシフェル側の戦力ってのは？ なにも本人以外みんな操り人形なんて不安定なことはないだろ？」

「そうね。でも、実際の戦力は大半が操っている墮天させられた天使たちだと思うわ。それ以外は、使い魔とか？」

使い魔？ 僕と標が首をかしげる。

——ちなみに、標には昨日のうちに説明を済ましている。——

「うん。ゲームとか漫画によくあるあれだよ。」

ドゴンッ！

言い切るが先か（また）壁に穴が開くのが先か。僕と、一晩かけてほぼ完ぺきに壁を直したアンジェラが同時に絶叫を上げる。のほほんとしているのは、なにが来たのかを理解しているデュナメスだけだ。

「あれ。」

指差す先には、黒い小さな翼をつけた中学生くらいの背格好をした赤髪の少女。え、あれ？

「ふうん、中級使い魔ね。いいわ、アタシが相手してあげる。」

茫然と少女の方を見つめる僕と標をよそに、デュナメスが立ち上がる。「頑張ってくださいーい！ デュナメス様ー！」とは勿論アンジェラ。

「ていつ！」

相手の中級使い魔さん（たぶん150センチ半ばくらい）は掌から火の玉を一つデュナメスに向かって放つ。

それをデュナメスは軽くあしらう。それはもう飛んでくる蚊を払うがごとく。

お返しと言わんばかりに、今度はデュナメスが掌から光の珠を放つ。ファイ○ルフア○タジのホ○リ○とかアル○マとかを彷彿とさせる。それは見事に中級使い魔さんに直撃する。

メリヨっ、なんか人体から聞こえてはいけない感じの音がする。だ

が、さすが使い魔、割と平気そうだ。

すかさず、デュナメスが相手に急接近する。

「死にたくはないでしょ？　――分かるわよね？」

相手にしか聞こえないようにつぶやいたから僕らには彼女が使い魔になんて言ったのかは聞こえなかったが、使い魔は顔を真っ青にして眼を見開いている。よく見ればかすかにふるえている。

ついに、糸が切れたかのように使い魔はがくつと膝をついた。

「うん、えらいえらい。」

まるで家事を手伝った子供を褒めるような態度。いったい何したの？

「？　ちょーっと脅かしたただだよ。」

「脅した」の間違いではないでしょうか？

――それより。

「あうあうあう……。」

涙を流して苦笑いするアンジェラさん。そんな彼女の視線の先には、壁にあいた穴が一つ。

「――すみません、お願いします。」

「ううっ……いつも泣くのは下っ端なのですね……。」

ホント、すみません……。

心で謝る僕。しんとする居間で聞こえてくるのは、今日のニュースくらいだろう。

さて、今日も今日とて学校ですよ奥さん、華金でも学校ですよ。

教室で刀に「今日は遅かったのだな」と言われたこと以外に何ら変わりなく今日が始まりますよ。なんか見慣れない新しい机が運び込まれていたけれど何ら変わりなく始まりますよー。

「あー、転入生の紹介をします。」

――何ら変わりなく始まりますかー？

今の僕には、一つの予感がしていた。ラノベ脳ならだれもがすぐにこれと思うだろう。

ざわめく教室内で、おそらく僕と同じことを考えているのは標。

「入ってきなさい。」

担任の一声で教室の扉ががらっと音を立てて開く。

入ってきたのは、まあ、予想通りに「あー、転入生のデユナメスⅡ
ノーブル・ヴァーチェスさんです。」だった。

「デユナメスⅡノーブル・ヴァーチェスです。気軽に、呼びやすい
ように読んでください。」

カカカツ、と、小気味いいリズムで黒板に自分の名前を書いて行く。
字、綺麗だな。

「それじゃあ、あそこの席に座ってくれ。」

そう言って、いつの間にか教室にあった見慣れない机を指差す担任。

「はい。」当たり前障りない返事。

——ちなみに、その空いた席というのは僕の席（窓際最後尾）の後
ろの席（今日からこっちが最後尾席）だ。

「よろしくね。」

まるで初めて会ったクラスメイトに挨拶をかわすように、デユナメ
スは僕に微笑みかける。

「あ、うん。よろしく。」

——とはいえ、すでに一晚共にした訳で（言い方に難なり）、今さ
らよろしくというのもなんだか変な気分だ。

ちょうど、チャイムが鳴った。

休み時間になり、担任が教室を出て言うてすぐに、僕の机の真後ろ
は人だかりができた。それが休み時間の度に続く。

おかげで、僕らがデユナメスにまともな確認をとれたのは、昼休み
になってからだ。

「えーと、いろいろ聞きたいことがあるのですが。」

「あ、どうやって学校に入ったとか？」

それもあるけれど、それよりも

「どうして、の方が先に知りたいかな。」

僕と標が、じっとデュナメスを見る。僕らは今、クラスを離れ、内緒話の定番、屋上——ではなく、僕が所属する写真部の部室にいる。暗室にするためにこの部屋の窓は完全に封鎖されているから、鍵をかけてしまえば屋上にいるのと大差はない。——広さは大差あるが「どうしてって、アタシもヒロも、命を狙われている身なんだから、下手にばらけるのは危険でしょ？」

命？ いや、初耳ですけど。——とはいえ、言うまでもなく、僕の命が狙われているのは確かなことだ。では、デュナメスは？

「命を……って、デュナメスも？」

「ええ、アタシも。だって、考えてもみてよ、相手にとって、わたしは今、邪魔ものでしかないのよ？」

言われてみればその通りである。現に昨日、ルシフェルに操られていたアンジェラの僕削除計画は、——結局は僕が解決したが——邪魔をしたのはデュナメスだ。それに、かなりの実力者なのも確かな話。

「というわけで、安全のために。それに、契りをかわした人と離れるというのは、なかなかさみしいのですよ？」

そう言って僕に寄ってくる。い、いろいろ近いです。そして標、妙に顔が怖いです……。

「でも、この学校……何というか、同族の匂いがしますわね。」

「え？ 匂い？」

そりゃあ、写真部の部室というのは、現像液等のおいがこもってなかなかきついかもしれないが、それは数分前の話で、今ではすっかり換気扇のおかげで換気済みなわけで——

「匂いなんて、しないけれど……。」

「まあ、アタシにしかわからないとは思いますが、ね。」

そう言って、ひょいと標の方をデュナメスが見る。ちなみに標は、僕の斜め後ろのいすに座っている。

だから、気付かなかった。標が小さく唇を傾けて笑みを形作り、人

差し指を立ててデュナメスに『しゃべらないでね』と無言で言っていたことに。

「……そうね。」

「ん？ どうしたのデュナメス。」

「いえ、なんでもありませんわ。」

そっか、なんでもないんかー。

——なんてわけで、割と平和に今日も放課後。

「おや、今日は写真部にはいなくてもよいのか？」

「あ、うん。今は現像液が足りないから。」

「そうか。」

と、適当に刀との会話を済まし、僕も帰ろうかなーと思った、その時。

「話がある。」

——と、帰りかけところを刀に呼びとめられたわけでして。

そんなわけで今僕は——屋上にいたり。

えーと、もしかして、うわー！？

——思えば16年（1月生まれの早生まれ）、彼女いない歴〓年齢の僕……もしかするともしかして！？

——だけど、刀の口からはそんな春色な言葉は出てこなかった。

『……削除。』

「!？」

刀が何かを振り下ろすのと、それを僕が避けたのはほぼ同時。間一髪、創造の力を開放するのが間に合った。あと数瞬遅ければ、今頃僕は真っ二つだ。

「ど、どうしたんだ刀！」

『——削除。』

どうしたんだ？ 一体どうしたんだよ、刀！ まるで昨日のアンジエラみたいだ！
——と、ふと、今朝の会話を思い出す。

「人の身体を？」

「そう。ゆうたいりだつ？ うん、なんか違うけどそんな感じ。」
なんでまた、そんなことをする必要があるのだろうか。

僕のそんな意志を呼んだのかと思えるほどのタイミングで、アンジエラが続ける。

「いわゆる『変装』みたいなものですよ。一般人の身体を借りれば、当然、見た目はその人のそれに変わりますよね？ そうすれば、ルシフェルに見つかるまでの時間稼ぎができるのですよ。——もっとも、こんなふうには人の意思に直接干渉できる天使自体が少ないのですがね。私たちにはできない芸当です。」

人の身体を借りる。もしかして、今の刀は刀じゃなく、天使の一人？
そして、ルシフェルにもう操られているとか！？

だが、刀——今は本当に刀かどうかはわからないが——は、考える時間をくれそうにない。

いったいどこから取り出したのかと思えるほどの長さの日本刀を構えて、僕に斬りかかってくる。

それを、本当にギリギリでかわし続ける。

だが、攻撃の手はゆるんだりしない。

『削除、削除、削除！』

刀の声だが、どこか刀のそれとは違う声が刀の口から放たれる。

まったく、ルシフェルも卑怯だ。僕を殺したければさっさと自分が出てきたらいいのに、こうやって親友を差し向けて、おまけに心を操って——許せない！

きゅっと、学校指定のスリッパが屋上の床とこすれて音を立てる。
つまりは、勢いよく僕の足が床をふんだということ。

「ていつ！」

音を立てた右足を軸に、思いつきり回し蹴りを決める。入ったか！
？ だが、そんなことを思えばそれは入っていないフラグである。

僕の足は、彼女の持つ日本刀で軽く抑えられていた。

「ちっ！」

素早くその足を引くが、わずかに遅れた。——スリッパが一刀両断された。

「（あ、あぶな……。）」

素早くその身をたてなおし、さらに攻撃をかわす準備をする。

——が、やはりほんの少し遅れた。

ザシュツ。

身体の中で、斬られたのだ。

とはいえ、ちゃんと身体はつながっているし生きている。もし創造^{アトム}の力を使って脚力を高めていなかったら、今頃逃げ遅れて本当に真二つだろう。

——ちなみに、あの後知ったことなのだが、僕が昨日強制^{リミッターブレイク}の解除をしたのはあくまで『力』の想像部分だけらしく、よって、僕は今だ『武器』といったものを生み出したりはできない。——

僕は、斬られた。およそカッターシャツ一枚分。

心臓がバクバクと音を立てる。そりゃそうだ、斬り殺されかけたのだから。

「（平和的解決——はできそうにないね。）」

残念そうに、また防一戦へと望む。もちろん、すきあらば攻撃に転じるつもりだが、何分、めちゃくちゃ速いのだ。今だ強制^{リミッター}の一つしか解除しておらず、攻撃方法が肉弾戦オンリーの僕には、勝機は限りなく薄かった。

「（真剣白刃取り——はとてもじゃないけれどできそうもないな。早すぎる。）」

憧れるが、そんな感情で命を落とすなんてまっぴらごめんだ。

「どうすっかな——っ!？」

ここで痛恨のミス。ずっと左のスリッパを脱いで（というか、斬られて失った）戦っていたせいで、足が滑り、バランスが崩れた。

まずい——! そう思ったその時だ。

ガチャリ!

屋上の扉が開いた。と、同時に、見たことのある白い球が刀に向かって飛んでくる。

それを、刀は難なく斬りおとし——あれって斬れるんだ——だが、そのすきに僕は距離を離す。

「大丈夫!? ヒイロ!」

おひめさま
救世主の登場だ。

「なんとかね。」

僕は適当に返事をする。

「それにしても、よくまだ強制を一つしか解除していないのに剣士ガブリエルから逃げられたわね。」

「まあね。」

何度か殺されかけたけれど、とは続けなかった。——刀がまた切りかかってきたのだ。

それを、二人同時にかわす。

「正直、あれを相手にするのはなかなか大変なことよ。」

存じ上げております。現に、創造アトムの力を最大まで速さにまわして、割とギリギリかわしていたっていうレベルですから。

「彼女は——おそらく、エクスシア・ソニア。階級は智天使ケルプで私よりも一つ上。能力はさっき言ったけれど剣士ガブリエル、——強敵なんてもんじゃないわね。」

「説明どうも。でも、残念ながら逃げるわけにはいかないんだ。そのソニアさん? が今入っているあの娘こは、僕の親友なんだから!」
い地でも助ける。そう決めていた。

「ええ、わかっている。——だから、アタシの力で、あなたの力を

強化するわ。」

——え？

「私の力は解放^{エデン}、この能力のおかげで、アタシは階級以上の待遇を
されているのよ。——なんて説明はあとあと。いくわよヒイロ！」

え？ ええ？？ い、行くってどこに！？

だが気がつけば、すでにデュナメスは背中から輝く白い翼を1対現
し、そして同じく気がつけば、僕の胸の中心が輝いている？！

「アタシの力で、一時的に次の強制^{リミッター}を解除するわ。——だからあな
たが勝って、ヒイロ。」

そう僕に眩くと、デュナメスから現れた輝く翼は消えうせ、同時に
輝きを失い、その場に膝をついた。

「デュナメス！？」

「ヒイロ！」

近づくようにした僕を、しかしデュナメスが制止させる。

「あなたは彼女に勝って！ それで、助けてあげて！」

デュナメスの眼は、本気だった。当然だ、こんなところで本気でも
何でもない眼をしていたら、僕は彼女にがっかりするところだ。

「——分かった！」

そう言って、刀の方へと駆けていく。

感覚的に、次の強制^{リミッター}が外れたことによる能力が何なのかは分かる。

待ちに待った——とはいっても昨日の今日だが——武器精製能力だ。

「はっ！！」

手には、一本の日本刀。刀の持つそれと同じ形のものだ。しょうが
ないだろ、パツと思いつくのはこの日本刀だったんだから。

カンっ！ と、金属と金属のぶつかり合う鈍い音が放課後の学校の
屋上で響く。

つばぜり合いって言うんだっけ、こういうの。

キリキリキリと金属と金属のこすれ合う音がする。ほとんど力は互
角だ。だが、それも少しずつ変わって——僕が押した。そして、押
し勝った。

『……!?!?』

驚く刀には目もくれず、攻撃の手を休めない。だが、相手も当然指折りの実力者だ、そう簡単には勝たせてくれない。

斬って斬られ、お互い、一瞬のうちにボロボロとなった。

——後で知った話だが、この勝負、あまりに二人の動きが速く、サポートをしようと思ったデュナメスが追いつかなかったのだとか。

——

「はーっ、はーっ。」

『……っ。』

らちが明かない。そんな声が聞こえたのは、その時だった。

「このような勝負では、らちが明かない。」

そう呟きながら、刀の背後から、黒いマントで身を包んだ存在（声を聞くからに、おそらく男だろう）が現れた。戸津ぜ習われただけでも驚きなのに、その男が、策の向こう側に立っていることが何よりの驚きだ。

ここは屋上なわけで、学校の中でも一番高いところにあるというのは道理であり——つまり、なにが言いたいかというと、その男、浮いているのだ。

「いくら創造を持つ男とはいえ、まだ能力をまるで扱えていないというのに、そのような半端ものにすら、おぬしは勝てぬというのか。」

男の顔は見えないが、きつと見下すような眼で刀を見ているのだろう。——それが気に入らない。

「——アザゼル。」

ぼそりと、おそらくその男の名前を呟くデュナメス。アザゼル——確か、堕天使や悪魔の名前としてもかなり有名な名前だ。

「あなたでしょ？ 刀さんを操っているの、——今すぐ開放しなさい、さもないと——」

「さもないと、何だ？」

男の声が、ニヤリと笑ったことを明確に表す。デュナメスは、ギリ

ッ、と歯を鳴らす。

「確かに私の方が、単純な実力は劣るだろう。——だがそれだけだ。結局、おぬしでは私に勝てない。」

「なら！」

思いつきり床を蹴る。デUNAメスで倒せないなら、僕が相手になる！だがそれは、飛んできた刀に食い止められた。

「！」

「そう焦るな若者よ、おぬしの相手はこの女子、おなじ私じゃない。——もつとも——」

二人揃って地面に降り立つや、刀は容赦なく剣を振る。それを飛び退きながらかわす。が、そんな激しい運動（表現に問題あり）を経験したことない（表現に問題あり）僕は、そううまく着地できるわけでもなく——

「いてっ!？」

着地失敗。足首ぐねった。いたい。でもそんなことを言っている場合じゃない。すぐに、次の攻撃を——!?!?

起き上がろうと耐性をたてなおしていると、すでに目の前には僕に向かつて日本刀を振り下ろしている刀の姿が。ヤバイ——眼が本気だ。

ギンッ!! 日本刀同士がぶつかり合い、金属音が響く。お願いだ——

「目を覚ましてくれ! 刀!!」

じゃないと、僕の命が危ないから!

そんな僕の願いがなかったのか、彼女の動きが鈍くなる。がたがたと震えて、そして——
ひ……い……ろ……??

「緋色!？」

日本刀を構えたままの刀が、たたき起されたかのようにハツとする。目に見えて『意識が戻った』のだ。

「刀! よかった、洗脳が解けて——」

そこまで言って、刀の腕の力がちつとも弱くなっていなことに気がついた。ちょ、待って、この体制、力が入りにくいんだよ！

「刀！？」

「緋色、なんだこれは！？ 自分の身体なのに、身体が言うことを聞かないのだ！」

な、なんだってー！？

それはあれですか？ 意識だけは戻ったけれど、身体はいまだに操り人形で、その先に待つのは――！？

「すまない緋色――これは私のせいではないのだー！」

そう言って、ものすごく激しく日本刀をたたきつけてくる。操り手であるアザゼルが焦ったのか、操られぬしの刀の意識が覚醒したからなのか、はたまたどっちも関係ないのかしらないが、急に戦い方が変わった。――これはきつい。

だが、加わる力がバラバラな分、弾き返すのが少しは楽に――なりませんでした。

「か、刀！！！」

「っ！」

一瞬だけピクン、と動きが止まった。いまだ！

僕はころがり、その場を離れ、一気に立ち上がる。刀の動きが止まっていたのは本当に一瞬で、立ち上がった僕の胸元すれすれを日本刀が通り過ぎる。すれすれアウトで服に切れ目が走る。さっきの一撃と合わせて、綺麗な十字ができましたー（はあと）――じゃなくって！

だんっ！ 痛む足に力を込めて、一気に距離を離す。情けないが、足を痛めた今のままでは一人ではまず絶対勝てない。

「デUNAメス！」

「ええ！」

僕が何かを続けるより早く何を求めているのかを察して、彼女は朝に見せたホ○リ○もどきを放つ。

だがそれは、目標には一步届かずに何かに遮られる。ああっ、おし

い！

「ふふふ、その程度の呪文では、私たちにはとどきませんよ？」

みると、アザゼルと呼ばれた黒マントは左の掌から禍々しい色の黒い球を出している。左利きなのかな？　なんてことを考えるほど僕も余裕じゃありません。

「あれが、絶対に勝てない理由？」

こくん、と、小さくうなづく。

「アイツの左の掌のあれ——あれが、私の放つ光弾を打ち消す力を持つつのよ。たった1の力で、アタシの10の力を消せるって言えば、どれくらい厄介か分かるわよね？」

それは厄介だ。物凄く。

「つまり——アザゼルとか言うのがいる限り、デュナメスの攻撃はあっちには届かないって思うべき、かな？」

またも小さく、デユナメスはうなずいた。悔しそうだ。

「さあ、降参するのが、そしてアトムをこちらに引き渡すのが、身のためですよ？　デユナメス嬢よ。」

そうほざくアザゼルの下には、動かないであろう体を必死に揺さぶって僕の名前を叫ぶ刀の姿が。——くそ、足首を少し痛めただけで、これだ。——なんだよ、『神にも悪魔にもなれる』？　笑わせないでくれ、僕は、足首が痛いだけで走ることもできないただの高校生じゃないか！

「いやよ！　なんでわざわざヒイロを死なせに行かなきゃいけないのよ！　絶対にお断りよ！」

アザゼルはそんな彼女の答えに「そうか……」と呟き、息を一つ。そして——

「最後はアトム、あなたの親友の手によって二人共に殺されなさい。」

そう呟き、アザゼルは右手でぐっと握り拳を作る。

「い、嫌だ！　やめろ！」

刀が叫ぶが、その刀の腕は、止まらない。両の手にもつ日本刀を天

高く掲げると、その刀に、見間違いでなければ赤い炎が灯っていく。
「彼女の階級智天使^{ケルブ}は、回転する炎の剣とともにエデンの園にある命の木を守るために置かれたという話がある。エデンを守るはずの炎の剣に焼かれ死のうとするエデンの少女よ、どういう気分だ？」
嘲笑うような声。氣にくわない。

「黙れ！ アタシはまだ死なない！」

そう吐き捨て、とびきりの光弾を放つ。――が、やはり、かき消されて終わる。

「や、やめ……やめ……ろ！」

刀が、力強く反抗を繰り返す。が、その顔には涙が。そりゃ、嫌だよな、無理矢理体使われて、友達――刀がそう思ってくれていることを望むよ――を、殺させようとしているんだから。

「死ね。」

アザゼルのそんな声が聞こえたとき、状況が一変した。

一筋の光弾が、貫いたのだ。

アザゼルの右腕を。

「!？」

僕もアザゼルも、驚きを隠せない。こんな中で驚いていないのは、デュナメスだけだ。

「――遅いですよ、まったく。」

そんな彼女の視線の先には――驚くべき存在が。特に、僕にとって。

――3対6枚の翼を背中にはやしている――

――二対の拳銃を構えている、それと同型の拳銃を幾つも空中にキープしている――

――ニット帽の少女――

「し、標――!？」

「うん、そうだよ。」

のんびりとした口調、やはり、標だ。

でも、なんで!? どうやって!? なにがなんだかわからない。
そんな僕をよそめに、デュナメスが標に声をかける。

「遅いですよセラフイム先輩。——でも、来てくれて、うれしいです。」

先輩?! デュナメスの?

もうなにがなんだかわからない。——ただ分かるのは、一気に状況が変わったということだけ。

一番大きいのは、アザゼルの右手が撃ち抜かれたことにより、刀を操っていた力が消え、彼女が自由になったということ。

「ひ、緋色、わ、わた、私は……っ!」

半分涙目になって、刀は僕に訴えかける。わかっている、君は何も悪くない。——悪いのはあのアザゼル——そして——ルシフェルだ。僕が彼女のもとによたよたと痛む足を引っ張りながら近づいている間にも、戦場は動いていた。

「まさか、あなたほどの方まで来るとは思っていませんでしたよ。
それも、人間に身体を借りて。」

「一応、本人の許可は得ているよ?」

かちやりと、標の持つ銃が音を立てる。空中にキープしていたのも含めて、ざっと20の銃口がアザゼルを狙っている。

「——容赦はしないよ?」

ガチャリと、もう一度、拳銃たちが音を立てる。20の銃口があやしく光ったように見えたのは、きっとアザゼルの見間違いではないのだろう。

「——ふ、ふふふ……さすがの私も、20の魔法弾を吐く鉄の鳥を操る少女相手に、勝てるとは思っていないさ。」

実際、アザゼルの放つ闇弾が真価を発揮するのは、交じりつけのない魔法——つまり、デュナメスの放つ光弾相手くらいなのだ。

それに、彼女の階級は熾天使——^{セラフ}天使の中では最上階級である。とはいえ、この階級も、解放を持つ彼女の存在によって、あまり意味

をなすものではなくってきているのは事実なのだが。

「――私が滅されても、ルシフェル様がいる限り、お前たちに平和は訪れないと思っておけ――」

マントで顔は見えなかったが、彼の顔が穏やかであることが、なぜだか標――もとい、ネハシム・ラファエルには理解できた。

「――ならば、ルシフェルを滅するまでだ。――お前の様にな。」
そう呟いたのは、まぎれもなくセラフィムの方である。

瞬間、彼女の武器である拳銃^{アルテミス}たちが、魔法の弾を一斉に放った。

――アザゼルの身体は、塵も残らず、消え去った。

休息と敵（かたき）

「本当に、すまなかった。」

「ゴメンね緋色く、もっと早く言っていたら、もっといろいろ楽だったんだけどね。」

どうしてこうなった。

僕の目の前には、まさしく土下座ポーズをとる刀と、あっけらかんと事情を話す標の姿が。

どうしてこうなった。

どうやら、二人の話を分かりやすくまとめると、

「いつものように学校から帰ってきたら声が聞こえて、ヒロが危ないと聞いてすぐに天使の言葉を承諾したら、身体の中に違う意識がある感覚がするようになって、でも、それも慣れてきたかというところに、突然、あの男が現れて——そこから先のことは、屋上まで覚えていない。」とは刀談。

「実は緋色の家にでっかい穴ができたあの時には、私はラファエルさんと意識の共有を済ませていたんだよね。でもなんだか話しくらくって、で、あの日はアザゼルすることに気づけなくって、電車ですでに3駅位家に向かっていたから、あれだけ遅れたんだ。ほんとゴメンね。」とは標談。「そうだったのか……。」これ僕談。

しかし、驚いた。まさか身近な二人が天使だなんて。いや、なんかいろいろ説明不足な表現なのはわかるが。それも、デュナメスよりも、二人とも階級は上だというじゃないか。

——だが、デュナメス達いわく「私のせいであまり階級が役にたっていないのも事実」らしい。だからなのか、階級が智天使ケルブと呼ばれる存在らしい刀は、それより一つ下の座天使スローネであるデュナメスに敬語（もどき）で話している。逆にデュナメスは、タメ口だが。

そんな中、僕は僕が一番驚いた相手に声をかけた。

「標。」

「なくに？ 緋色。」

標はいつもと変わらず、のんびりした口調で返事をする。本当に信じられないが、彼女の階級は熾天使^{セラフ}、『天使』に属する階級の中では最上級だというのだ。

「ラファエルと同じ意識を共有しているっていうのは、本当なのか？」

標は「本当だよ。」と、やはりいつもの返しをする。

「でも、基本は私、道標のまんまだって、ラファエルさん言ってたよ。そうだ、知ってた？ 意識を共有するって、記憶を共有するもの一緒なんだって。」

へえ、それは便利だ。

「ラファエルさんはね、デュナメスさんの部隊の元リーダーなんだ。」

さらに話を聞くと、階級というのは、やっぱり、会社の部長や係長といった肩書と同じようなもので、変化することがあるらしい。それで、座天使^{スローネ}だったラファエルさんが熾天使^{セラフ}に昇格すると同時に、今の部隊長、デュナメス^{スローネ}・ヴァーチェスにその座を譲ったのだとか。だからあの時デュナメスは標のことを「先輩」と呼んだのか。ん？ まてよ？

「デュナメス、もしかして、標のこと——」

「ええ、知っていましたわ。」
やっぱりか。

「でも、最初はなんとなくそんな気がするな程度でしたし、彼女から『言わないで』とも言われていましたので。」

そこまで言って、デュナメスは標ことラファエルさんに視線を投げる。標は、「いやゝごめんねゝ、言い出しにくくてさゝ。でもやっぱりこういうことって、自分の口から言い出すものだと思うってねゝ。」と一言二言。まあ、確かにそれは大事だけどね？

「——まあ、いいや。標なのは、間違いないみたいだからね。」
ただしゃべり方をまねただけなものじゃないことぐらい、10年来

の幼馴染なのだからわかる。標もそれに納得したのか、「ありがとう」と一言。どういたしまして。

「そういえば、あれすごかったね。」

「あれって？」

僕は、あの日——といっても昨日だが——を思い出しながら言う。

「ほら、アザゼルとかいうのを撃ち抜いた、あの拳銃。なんかガ○ダムファン○ルみたいで。」

あの宙を浮いていた拳銃、それはそれはもうすさまじいものだった。

「ああ、アルテミスのことね。」

そういつて標は、ポケットから羽根を一枚取り出す。それが急に光を帯びたかと思えば、急に拳銃へと姿を変えていた。いったいいつ変わったんだ！？

「天使の最大の武器は、その翼なんだよ。翼から羽根を抜けば、それを武器にできる。——だから、事実上、私は私の羽根の枚数だけ拳銃を取り出せるわ。」

それはすごい！ あんな拳銃を羽根の枚数だけ出せるというのだから。しかも、彼女の羽根の枚数は3対6枚、普通の天使より遥かに多いのだ。じゃあ、それで物量作戦ができるんじゃない——そう言ったところで、標が「でもね」とつぶやいた。

「確かに、羽根の枚数だけ、拳銃が生み出せるよ。でもね、それを一度に扱えるのかって言ったら、答えはNO、到底無理。うーん……

たとえば、私が母艦、^{アルテミス}拳銃が戦闘機とするね。」

そういつて、彼女は一つのたとえ話を始めた。

「一つ一つが高い戦闘力を有する私の自慢の戦闘機。それも、この戦闘機は私の命令ひとつで動く。それって、すごく強いじゃない？」
確かに、すごく強いだろう。現に、あのアザゼルを塵に還したのだから。

でもね。標は続ける。

「その命令を下す私は、一人だけ。一度にできる命令も、当然限られてくる。」

あ。そこで僕は気付いた。

「そ。数が多いと、簡単な命令しかできないの。『攻撃』『防御』とか。それも、遠ければ遠いほど、反応は遅いし。何より、私への負担が大きすぎるの。」

あまりやりすぎると頭痛が起きるとか。それは——あまりいいことじゃないな。

「だから、一度に操れる量は、最高でもせいぜい30くらい、アザゼル戦のあの量でも、本当に『構え』と『撃て』の命令くらいしかできなかったもの。」

「そっか——なんか、ごめん。」

「うんにゃ、別に気にしてないよ。」

「——それは別として——」
『?』

標と刀が同時に僕を見る。頭の上には疑問符【クエスチョンマーク】がずらり。グレイズできません。

「さっきから気になっていたんだけど——」

標も刀も、妙に大きな荷物を持っている。今は当然床の上だが。

「——その荷物、何？」

ついに聞く。聞かなければならない。現家主として！

「学校の制服とか普段着とか寝巻とか？」

「巫女服と木刀と、その他いろいろだ。」

二人して、そんなものをなぜ！？ 今度はぼくが疑問符【クエスチョンマーク】。

僕の幼馴染と小3からの幼馴染は、まずお互いを見て、そのあと僕のほうを向いて、

「今日からよろしく。」

「しばらく、泊めさせていただく。」

「え？」

僕の口から洩れたのは、そんな間拔けな声だけ。いやだって、ねえ。標は確かに小さいときはよく家に泊まったりしたけれど、刀は初め

てだ。いや、そこじゃないって。

「だめ〜?」

「だめ、か?」

「え、あ、いや、その、ええ?!」

救いを求めるように、僕はデュナメスのほうを見る。すると帰ってきたのは――

「あ、泊まるように言ったのはアタシだから。」

「な、なんだって!」

「あれ、今日の夕食はカレーなの?」

それはナンだって! カレーが食べたいのか? じゃなくて!

「ど、どうして!」

「だって、カタナちゃんはヒロを殺すように命じられていたのに、失敗したじゃん? おまけにラファエル先輩はカタナちゃんを操ってたあの男を滅したわけだし、命の保証がないのよ。なら、こんなに少数、ひとまとめにしたほうが安全でしょ?」

ま、まあ、確かに、これが10人20人もいたらとてもじゃないが無理だが、たった2人、幼馴染2人を家に泊めるだけじゃないか。

――気が付けば、家には女の子だらけなわけだが。

沢山あった空き部屋も、今はいっぱいだ。主に少数部隊であるデュナメス部隊の地上拠点として。

「――わかった。いいよ、空いている部屋、適当に使って。」

そう言うのと、二人して満面の笑み。くそう、男は女に負けるのはどんな世界でも共通ですか?

沢山あった空き部屋は、今では空きがあつたかなとさえ思えるほどにぎわっています。よ? 父さん、母さん。

足が痛い。それはもう致命的に。

昨日の帰り道だって、デュナメスの肩を借りて帰ってきた感じだし。一応、歩くことはできるけれど、『肩ぐらい貸す』というなら、借

りようじゃないか。美少女の肩なんて、めったに借りることなんてできないだろ？　——なんて下心が全くなかったわけじゃないが、少なくとも、素直にうれしくお言葉に甘えることにした。ホント痛いよ。

そんなわけで、本日土曜日が結局これと言って大問題もなく過ぎていったのはうれしい限りだ。今日誰かが攻めてきたら、情けないがみんなに任せ切るしかない。

——そんな今日も、夕食の時間が近づいて参りましたした。

これだけ家にいるのだから、いつもさぞ賑やかなのだろうと思っていたあなた、実はそうでもない。

デュナメスを除くデュナメス部隊のみんなは、いろいろと忙しいらしく——デュナメス曰く『少数の精鋭部隊』らしい——、普段は天界——デュナメス達の故郷——に昼から戻って、そのままそっちで夕飯も済ませていたらしい。だから普段はデュナメスと二人つきりなわけで、騒がしいというほど賑やかでもない。

——のが、昨日おとといの話。

今日はやけに騒がしい。まず、標と刀が加わったこと。普段の食事に二人も加われれば、十分に騒がしくなる——と思う。だが、それ以上にすごかったのが——

『『『『『お願いしまーす！』』』』』』

超多重音声。天使×10。

つまり——えっと——何人だ？

僕、デュナメス、標、刀、アンジェラ、天子さんたち（×10）——合計15人——

そんな人数分、材料あったかな？

「任せてください。」

そう切り出したのは、刀だった。

「——では。」

もってきていたカバンから何かをとりだすと、僕に一言残して、刀はどこかへと走り出した。速っ！？

「あ、待ってよ刀く！」

「ラファエル先輩、財布財布！」

刀を追うように、標とデュナメスまで走り去っていった。やっぱ速っ！？

——財布？　もしかして、材料を買いに行ってくれたのかな？　それはありがたい。

ぺしぺしと痛む方の足を少し上げて片足でけんけんしながら冷蔵庫へと向かう。ガチャリ。なになに、焼き肉のタレ（甘口）×1、マヨネーズ（残り5分の1）×1、2リットルペットボトルのお茶（残り500mlあるのこれ？）×1。……。わくお。

居間では「お腹ペコペコ。」とか「お腹すきましたね。」「ねく。」とか、「デュナメス様と同じ食事を食べられるなんてしあわせく。」とか、とにかく空腹の天使さんたち。——頼む刀標デュナメス、早く材料を買ってきてくれ……。ぐぎゅう……。あ、僕のお腹も……。

僕の願いがかなったのか、刀達はわりと早く帰ってきた。その両手にはたくさんのお買い物袋。うう、足をくじいているとはいえ、（なにげに家の中で唯一の）男の僕が手伝い一つせずに待つしかできないというのは、少々あれだ……。と、とにかく、せめて食事の用意くらいはやらなければ！

と、言うわけで気を引き締めて台所に向かった僕だったが——すでに3人が3人とも場所を使っていた。なんて行動力。

「あ、緋色く？　なにしに来たのく？」

「何しにって、手伝いに来たんだけど……——」

あたりを見渡す。かんかんかんとととととずばばばどひゅーん。……何この効果音祭り。一部おかしい音が聞こえるのですが？　なにどひゅーんって。

「と……とところで、なにを作っているの？」

怪しげな擬音のせいで不安になりながら、恐る恐る聞いてみる。

「カレーですよ。この人数を作るにも楽ですしね。」

明らかにカレーを作る音じゃないものが！？　ねえ、ほんとにどひゅーんってなにどひゅーんって！？　というか、カレーやっぱ食べたかったの？

と、ふと、

「（そういえば、この3人の手料理なんて食べたこと無かったな……。）」

デュナメスはともかく、幼馴染の標や刀の料理も食べたことがない。

——擬音が不安だ。

「手伝うこと、ある？」

「ないよ。」　標の攻撃。グサッ

「ないです。」　刀の攻撃。グササッ

「ないですね。」　デュナメスの攻撃。グサササッ

ないの3連発。うう、地味に傷つく……。

仕方なく僕は、植えた天使たちの待つ（表現に難なり）居間に向かうことになった。

居間で待つこと数時間。やはりカレーは時間がかかるが、それでもかなりの早さでそれは出来上がった。

紛うこと無きカレーだ。それはそれはもう。あの擬音は本当に何だったんだ？　特にどひゅーんって。あの打ち上げ花火の音を縮小したようなあれは。

「ほら食べてみて。自信作なんだよ？」

「あ、うん。では。」

『『『『』』』』』

どこことなくフラグ臭い標の催促に、僕は一抹の不安を抱えながら答える。とりあえず、スプーンにひとすくい。スパイスの食欲をそそる強烈な香りが、僕の鼻孔を刺激する。ぐぎゅうう。身体は正直で

す。

一口、食べてみる。

ぱく。

——、——、シャキッ？

何でキャベツの千切りが入っているの？ 別にいいけどさ。

——、——、今さらだけどさ、

『『『『『おいしい！！！！！！！！』』』』』

僕、アンジェラ、天使（×10）の声が重なる。いや、これすごくおいしい！

「そう？ 現世^{こうち}にない材料使ったかいがあったや。」

そう照れ笑いを浮かべるのは、何かを千切りしていたデュナメスだった。この千切りキャベツを切ったのがデュナメスということ、間違いないだろう。——こっちにないもの？

「そのキャベツみたいなやつのことですよ。」

刀がデュナメスに代わって補完してくれる。「なんでも、辛みと旨みを同時に持つ野菜の様ですから。」

言われて、もう一度そのキャベツもどきを見してみる。カレールウにまみれていて色がよくわからなかったが、よく見ればそれは緑ではなく、どちらかというと褐色だ。

「すごいですデュナメス様！」「レシピ！ レシピを教えてください！」「キャーデュナメスサマー！」と、気がつけばデュナメスは天使たちに囲まれていた。ホント、慕われているんだなあ。

もう一口。ぱくり。うん。おいしい。

カレーも食べ終えて（珍しく3杯も食べた）、お先に風呂も済ませてもらい、次に誰が入るのかを聞こうとした時——

「あ、刀。」

「ぬ、緋色か。」

そこには、いつ着替えたのか、青色を基調とした巫女服に身を包ん

だ刀が庭にいた。その手には、いつもの木刀。

それを、いつものように素振っている。強いていつもと違うのは、
いたってまともな素振りだったことぐらいだろうか。――それって
そうとういつもと違うことだ！

「意識の共有――記憶の共有――記憶を共にするということは、な
かなか不思議な感覚だな。まるで知らないはずの剣術が、どんどん
頭に流れ込んでくる。――いや、まるで初めから知っていたような
感覚だ。」

相変わらずの男勝りな口調、それを、僕はしっかりとときくことにす
る。

久しぶりの会話な気がする――実際は、昨日もおとともいも会話して
いるのだが――から、のんびりと、会話でもしよう。――と思って
いたんだけどなあ。

実は僕ら、まともな共通の趣味といったものがない。つまり共通の
話題がないのだ。今ある話題となると――

「――よかったよ。」

「む？」

何がだ？ とでもつけたしそうな顔だ。

「いろいろあったから、落ち込んでいるんじゃないかな――とか、思
っていたからさ。」

その言葉にウソはない。洗脳されて、人殺しをさせられかけて、普
通、何らかの感情が起きないわけがない。負の方へ。

「――うん。そうだね。」

珍しく刀が女の子らしい反応をする。いつもの彼女なら「うむ、そ
うだな。」くらい言いそうだが――それくらい、きつかったのかな
……。

ラノベの主人公ではないが、僕も乙女心が判らない人種だ。だから、
言葉に迷う。

「ありがとう。」

「え？」

「いや……言いたかったただけだ。気にするな。」

なんだか、すっきりとした顔立ちになった刀が呟く。僕、お礼を言われるようなことしたかな？

でも、まあ――

「どういたしまして。」

とりあえず、そう返しておくか。

その時だ。黒い翼の少女がとんできたのは。

『!?!』

さっと刀は身構える。僕も身構えるが、どうしても足を意識してしまふ。

少女は、いつぞやの使い魔とよく似ていた。違うのは、発する緊張感^{プレッシャー}が段違いなことか？ 前に出会ったのが中級なら、こいつはそれ以上なのだろう。上級使い魔？

「緋色は下がって!」

言うが早いか、動くが速いか、刀はいつかの日本刀――スサノオ――を構えて飛びかかる。確か、天使の武器は普段は羽根になっているんだっとな。

すかつ 上級使い魔（仮）は、刀の一撃をひらりとかわす。だが刀と手当然、本気の一撃なわけがない。

べきっ! まさかの回し蹴りは、しっかりと相手の上級使い魔（仮）の無駄な肉のないわき腹にはいった。しかし相変らず、人体から発したらまずそうな音を立てる。今の絶対折れたでしょ？

『!?!』痛みを耐えるような表情をした上級使い魔（仮）は、カウンターと言わんばかりに火の玉を掌から放つ。それを――

「無駄です。」

刀は、日本刀で受けとめた。火の玉は刃の部分で受けとめられ、綺麗に二つに分かれ、火の粉となって消えた。

「今度はこちらから――」

言うが早いか動くが速いか、刀は高速で接近する。

人間は動けなくなるのだろうか。足が痛いとか、そんなものは関係ない。動けないんだ。

「ヒイロ！」

男の腕が僕の顔をつかむ直前、白い光弾が男の顔面をとらえた。それを皮切りに、僕の身体は自由を取り戻した。急いで、後ろに逃げる。

見れば、デユナメスをはじめ、残りのみんながそこにそろっていた。「これはこれは解放のお嬢様、今日はあんたにやようはないんだ。」

「アンタがアタシ達に用がなくても、アタシ達はアンタに用があるのよ！ ルシフェル！！」

「！ こいつが……？」

もう一度、黒い燕尾服の男を見る。顔面に光弾が直撃したというのに、その顔は涼しそうだ。この男が、僕の命を狙う男——！？

「はっ！」

もう一度、光弾がルシフェルの顔をとらえる。

「これぐらいじゃあ痛くもかゆくも——」

だが、標はルシフェルに喋らせる気もないようだ。彼女の武器の拳銃が26丁、彼女の操れるほぼ最大の拳銃が一度に火を噴く。

「ちょ」

ルシフェルの右腕に5つ。

「おま」

ルシフェルの左腕に5つ。

「いてっ」

ルシフェルの右足に5つ。

「やめっ」

ルシフェルの左足に5つ。

「ラファエ」

ルシフェルの身体に5つ。

「——ったく、痛いなあ。話は聞けよな——」

B a n g 最後の一丁が、ルシフェルの顔面を撃つ。

凄まじい総攻撃だ。さらに恐ろしいことに、そんなルシフェルに向けてアンジェラは高速で矢を放ち、デュナメス部隊の天使（×10）もそれぞれ飛び道具で攻撃している。そのデュナメスも、光弾を撃ち続けている。刀は背後から、炎の衝撃波を浴びせる。

凄まじい。それ以外、なにをどう言えと？

——言葉はまだあった。

恐ろしい。

なにが？ これほどの攻撃を受けてもまだ立っているルシフェルが、だ。

それも、ずいぶんと涼しそうな顔をしている。

「バ、バケモノめ……！」

デュナメスが悪態をつく。僕もそう思う。こいつは、正真正銘の化け物だ。

「ひどいなあ、俺も元はお前たちと同じ天使だったんだからさあ、その扱いはないんじゃないか？」

その顔には、嫌なうすら笑いが。

「しっかしなあ、そんなんで俺を倒せるのか？ 俺、最強だぜ？」

台詞の最後には（笑）が付きそうな感じだ。——本当に、こいつは腹が立つ。

「っ。」

思いっきり、全力で、創造の力を右手に集めた一撃を放つ。^{アトム}

——効くはず、無かった。

「なんだ少年、蠅でも止まっていたか？」

「あ……あ……っ。」

ルシフェルの背後に悪魔が見えた気がした。

『逃げて』そんな言葉が聞こえたときには、僕は空を飛んでいた。殴り飛ばされたようだと思ったのは、ルシフェルの追撃のもう一発を殴られた時だった。

「なんだよなんだよ、大したことないねえ。」

「こ……の……!」

殴られながらも身体を捻らせて、何とか蹴りを決める。だがやはり、効いていない。それどころか、逆に地面にたたきつけるように蹴りを入れられる。肺の中の空気が一気に口からあふれる感覚がする。強いとか、そんな次元じゃない。

——勝てない。

そう、確信した。そう、今の僕には、どう頑張っても勝てない。

家の庭に背中から盛大に着地した。クレーターが出来上がり、土が舞い上がる。

遅れて、僕の身体の上にルシフェルが着地した。

「がっ——!？」

肺に残っていたわずかな酸素も、その衝撃で一気に吐き出す。ヤバい、意識が——

「んー、つまんねーなあ、もちよいっと抵抗してくれよお。」

もう一発、思いつき踏まれる。——死、ぬ——

ふと、走馬灯のように、デュナメスが家に来た時のことを思い出す。

——そういえばあの時——デュナメスが傷ついたのを見て——^{リミッター}強制

が一つ外れたんだっけ？

外れるよ——^{リミッター}僕の強制——

外れてくれよ——^{リミッター}僕の強制——!

パキン

鎖が斬れるような音が聞こえた気がした。

僕はこの音がなにを示すものなのかを知っている。^{リミッターブレイク}強制の解除。

知識が直接頭に流れ込んでくる。前にデュナメスに手伝ってもらって一時的に解除した時は武器精製能力だったが、今回はどうやら違うようだ。

ルシフェルはまだ僕の上だ。正直重い。

意識がなくなる前に、何とかしないと――

「――っ！」

声が出ないから、気合だけで、魔法弾を放つ。

魔法精製能力。これが今回外れた強制らしい。リミッター

「!？」

いきなり魔法弾がとんできて慌てたのか、ルシフェルが僕の上から飛んで逃げる。

「――二つ目の解除か。」

どうして強制の解除の回数が判るのかは知らないが、その通りだ。リミッターブレイク

「んー……そうだなあ、」

顎に右の人差し指を当てて考えるルシフェルに、もう一発魔法弾を放つ。

それを、ルシフェルは左手で払う。

「よし、決めた。」

そういうと、いきなりルシフェルの背中から黒い6枚の翼が現れた。

「もー少し待てば面白くなりそうだし、今日はこれで引き上げますかね。」

広げた翼は、暗い夜だというのにはつきりと黒いことが分かり、はつきりと大きいことが分かった。

「あ、そうそう、そこに倒れている天使はまだ生きていると思うから。」

そう言い残して、ルシフェルは飛び立った。追う気力も、追撃する体力も、もうない。それより、そこに倒れている天使？

ふと、一人の少女を思い出す。ルシフェルより先にここに来た少女。みると、血まみれのその少女から、黒い煙の様なものが浮かび上がって行った。

あ……ヤバイ……意識が……。

「ヒイロ！」

「でゅ……デユナメス……あの子、まだ生きているみたいだから……

…。」

「うん、わかった！　——すごいよヒロ、あのルシフェルを追い払ったんだから。」

「あいつが…：勝手に帰っただけだよ…：。」

はは…：。小さく笑ったところで、意識がとんだ。
ブラックアウト

「ん…：。」

目が覚めると、そこには見慣れた居間の天井が。

むくりと起き上がる。さすがに服はそのままだったが、額から冷たい濡れたタオルが落ちてきた。

その瞬間——

「ヒロ！」

「緋色く！」

「緋色…：。」

胸に二つと背中の一つの衝撃が。胸には標とデュナメスが。ということは、背中のは刀か。

「みんな…：。」

背中や胸に、しつとりと暖かいものが。これは、涙？

僕のために泣いてくれているのか？　——うれしいことじゃないか。

自分のために泣いてくれる人に出会うなんて、そう簡単なことじゃない。そんな人が3人もいるなんて、僕は幸せ者なんじゃないか？

これで命が狙わなければ最高ののだが、それがなければ、きっとこんな状況にはならないのだろうか。

「——みんな——ありがとう——。」

少しして、嬉し泣きも落ち着き、僕も一息ついていたところ。

「そういえば、あの娘は？」

「あの娘？」

「ほら、あの天使。」

僕がここで言う天使とは、当然、ルシフェルのせいで血の海に沈みかけていた上級使い魔だと思っていた娘のことだ。

「彼女なら、アンジェラ達がついています。——それにしても、こんな形で再会とはね……。」

「え？ 知り合い？」

驚きだ。それならなぜ、さっき血だまりに沈んでいた時に何も言わなかったのだろうか。

「ええ。彼女はアンジェロー——アンジェラの妹です。」

「ええ！？」

ならなんで、さっき気付いてやらなかったのだろうか？

そんな僕の考えは読まれているのか、標が答える。

「ルシフェルの『墮天』は、いわば一種の毒の様なものなの。れっきとした天使が彼の手によって墮天させられた場合、徐々に毒に侵されるように姿が変わっていくの。彼女の場合、顔とかにもちよつとずつ変化が見られたけど——一番わかりやすいのはやっぱり『翼』ね。」

「翼？ 翼がどうしたの？」

「天使の羽の色は共通で白なの。でも、彼女の翼の色は——」
黒。なるほど、それは分かりやすい変化だ。

「でも、彼女のことを知っている存在からしたら、彼女が発する『匂い』も、変化の一つ何だけどね。」

「匂い？」

そういえば、前にデユナメスが学校で「同族の匂いがする」とか言っていたっけか？

「あ、もちろん臭いとかいったものじゃないよ？ まあ、言うなら気配みたいなものなんだけど——天使のそれは、個人差が強いものよ。特に、能力の高い存在ならね。」

なるほど。つまりあのときデユナメスは、——標は近くにいたから——刀の気配けいを感じた、というわけか。

それが変化していて、なおかつ見た目もちよこちよこと変化してい

るなら、パツと気付くのは難しいだろう。

「無事なら、安心だよ。」

そう、安心だ。――あ、安心したら、また眠気が――

「ゴメン――ちよつと、寝る――」

ブラックアウト

そのまま再び意識がとんだ。

変な寝方をしたせいで、夜中の2時に目が覚めてしまった。

「……あー……。――」

妙に目がさえて、もう一度眠れない。

横には、ぐっすりと寝ているデュナメスや標が――

――あれ？

「あーあー、ほら、布団に入って寝ないと……しょうがないなあ。」
ぽつぽと布団をとりだし、適当なスペースに布団を敷き、デュナメス達を寝かす。

「――……。――」

さて、下手に僕が男から雄に変わらないうちに自分の部屋に逃げるとしようか。襲う勇気なんてこれっぽっちもないけれど。

「んゝ……ヒイロゝ……。――」

デュナメスの寝言が聞こえる。僕の名前？

「――約束して。絶対に、私のヒーローになるって。」

その言葉に、何かが引っ掛かる。この言葉を、僕は聞いたことがある。でも、いつだったかな？　それが思い出せない。

こういうとき、思い出せない理由なんて、一つしかない。

10年前の事件に関係することだ。

――それが判っても、わからないことはわからないのだが。

思い出せないというこのもやもや感は、たとえどんなに年をとろうと、間違いない気持ちの悪い、嫌な感覚なのだろう。

はあ……どうしてこう、思い出せないのかなあ……。

眩きながら部屋に入ると、そこには――

「あ。」

「え？」

アンジェラがいた。ついでにベッドは見慣れぬ天使――確かアンジェロだったっけ？――に占領されていた。

「あー……ごめんなさい。」

「できれば、謝るより先に状況を教えてくれない？」

話をまとめれば、こうだった。

「庭から一番近い個室がここだったから運び込んだ。」

「服を着替えさせるのに、男がいる部屋で着替えさせるのには抵抗があった。」

とのこと。男が寝ているベッドを使うことには抵抗がないのね。そのことを突っ込むと、

「――あっ！」

素ですか。

「あ、あなた、このベッドの上で、変なこととかしていないでしょ
うね……？」

「変なことって……。」

――まあ――ノーコメントでお願いします。

明らかに「うわあ……」と思っているであろう顔。うんまあ、今の質問に対して黙るっていうのがどれほど墓穴掘ったかはわかっている。

「あ、あはは……。」

「うう、こんなのベッドに大切な妹を寝かせたのだと思うと……。」

「

うわあ、ひどい言われよう。――それより、どうしようかなあ。今夜。

――仕方ない、居間に戻るか。

「ま、ベッドで寝るのは諦めるか。その娘、起きたら言っただね。『家主が心配していた』って。」

「ええ。『変態が心配していた』と伝えておきます。」

思ったけど、彼女、僕のこと嫌いだよ絶対。

「――もうそれでいいよ。」

それで妥協しちゃ僕ってヘタレ？

あれ？

居間に戻ると、デュナメスがちょうど起きた。

「ヒロ……？」

「うん、僕だよ。」

若干寝ぼけているデュナメスに、僕は答える。

「アタシ……昔の夢を見ていた。ヒロに初めて会った時のこと。」

そっか、あの時のセリフは、最初に会った時のものなのか。

「――まだ、思い出せない？」

「……ごめん。」

「ううん……ゆっくり思い出せばいいよ。それに――」

「それに？」

「――私は、覚えている。」

約束を相手だけが覚えているって、どんな感じだと思う？

相手が可哀想？ そうだね、僕もそう思うよ。

でも、約束を忘れた方も、時と場合によってはかわいそうだと思うわ
ないか？

大事な約束を、思い出せないんだ。

きつと簡単なことなのだろう。小学生のころの約束なんて、そんな大層なものじゃない。

でも、それは第3者の視点から。約束は、相手がどう思うか、だ。

——どうも思えないくらいに、今の僕は覚えていないんだ。強いて言うことがあるなら——ごめん——くらいかな。

もう一度寝るまでに、僕はそんなことを思った。

少数と多数

「申し訳ありませんでした。」

どうしてもこうなった。

目の前には、まさしく土下座ポーズの火の弾墮天使ことアンジェロさんが。

どうしてもこうなった。

彼女の話をもとめるところだった。

「覚えていないや。」とはアンジェロ談。

「気がつけばいなくなっていた。アンジェロなら大丈夫だろうと思っていた。」とはアンジェラ談。「なんでやねん。」これ僕談。

覚えていないほど前から洗脳されていたのか、単にお互い興味がなののか。ここで後者なら僕はアンジェラに少し幻滅すると思う。

「——いつからかな、私がアイツの操り人形になったの。」

「あなた、放浪癖あるからいなくなっても誰も怪しまないからねー。」

「

ねー。じゃないよ。もう少し妹のことと思ってあげてよ！

——と、口に出せない僕はヘタレなのだろう。

「でも、まあ……よかったわ。」

「ゴメンね、お姉さま。」

本当に姉のことを「お姉さま」と呼ぶ人（天使だけど）って、いたんだね。なんてくだらない感想を持ってしまった。くそう、僕の馬鹿ラノベ脳め。ここは素直に感動しろよな。

と、力いっぱい抱き合う二人。おーい、アンジェラさーん、妹さんの顔が若干青いですよー？ 力入れすぎですよー？

——あ、倒れた。

「お、お姉さま、力を入れすぎです……。」「

あ、復活した。

「と、とにかく——私も、しばらく厄介になります。」

「あ、うん。でもできれば、アンジェラと同じ部屋にいてくれないかな？　もう部屋がないんだ。」

空き部屋がいくつも残っていたとは言うが、別に僕の家は特別広い豪華な言えなわけではない。すでに10人の天使とアンジェラとデユナメスと標と刀を迎えているんだから、部屋なんてもう残っていない。当然、基本的に二人以上で一組にしている。

「お、お姉さまと同じ部屋——！？　よ、よろこん——コホン。分かりました。」

「……。」

姉、アンジェラと同じ翡翠色の瞳が輝き、まるで感情が動いたのを示すように、濃い茶色の長い髪がふわりと揺れた。

明らかに喜んでいる。ならよし。

よく見れば、アンジェラのアンジェラを見る顔（ややこしい）が赤い。

——あ？

とりあえず、安心——できるの、かなあ……。

後に聞いた話だが、デユナメスや他の天使曰く「アンジェラはお姉ちゃんっ子。」「若干危ない道に入りかけている。」「ツン成分の極端に少ないツンデレ。」とのこと。どこでツンデレなんて言葉を知るんだろう。聞いてみたけど、教えてもらえなかった。

それから2週間、毎日のように、堕天使か使い魔が僕らの所へやってきた。

「強くなりたい。」

そんな王道な理由で、僕は進んで戦闘に参加した。おかげで、強制リミッターをあのと2つ、解除できた。この強制リミッター、いったいいくつかあるんだろう。

そんなある日——5月もうすぐ終わりかという、そんな日曜日。

久しぶりにクラブがあった。ほんと、活動期間が不定なクラブだよ。今僕は、その帰り道。

デュナメスはともかく、意外にも部活に入っていない刀や標は、今家にいるだろう。

うーん、冷蔵庫の中身も寂しくなってきたし、今日はスーパーでも寄って行こうかな。んで、彼女たちに何か奢ってあげよう。1, 2, 3……15人……お金足りるかなあ……。

とか考えながら、僕は電車を降した。

ちなみに現在の有り金は——残念、23円なり。ば、ばかな、これっぽちだと!?

——と、

「ん？」

ひゅーう……

何かが落下してくるような音。それと同時にいやな予感が。

——想像以上に、嫌な予感は的中した。

ダンっ！ それは見事な着地を決めた。お見事、10点ですよ。

「やあ、遊びころしにに来たヨ♪」

「ルシフェル……！」

クレーターはおろか、傷一つ無く着地した堕天使の長に、僕は睨みつける。

「こんなところでやろうってのか……！」

「ははっ、それも面白そうだけれど、もっと面白いところがあるから大丈夫。」

パチン。

一つ、指を鳴らす。その瞬間、強烈な光が僕を襲う。咄嗟に、攻撃に備えて守りの体制をとる。——だが、予想していた衝撃は襲ってこない。

恐る恐る目をあけると、そこには——

「……な!？」

だっ広い、なにもない空間。足元を、雲の様なものが流れていく。
——違う、雲の様なものじゃない、雲だ。

つまり今僕は、飛んでいる——!？」

「ここが俺達の故郷、天界だ。」

こつん、と、革靴が床を蹴る音が聞こえてきた。

「ここが？ このなにもない場所がか？」

「お前は天界を狭い箱庭か何かと勘違いしているのか？ ここには
なにもない、ただそれだけだ。」

「なるほど、なっとく。」

「そんじゃま、始めましょうか。」

次の瞬間には、光弾と黒弾がぶつかりあい、爆発が起きていた。

「……!」

「どうしたの？ デュナメス。」

「どうなさったのだ？ デュナメス殿。」

「——ヒロ？」

急にデュナメスが発したその単語に、標と刀が反応する。

「緋色がどうかしたの？」

だが、デュナメスは黙っていた。ただじっと、天井を見ている。

「——ヒロが、戦っている——？」

『!』

言われてから、ようやく一つの気配を感じた。天界で起きている、
二つのぶつかり合い。二つとも、よく知ったものだ。

「まさか、ルシフェルが天界に!？」

「ついに現れたか——」

2週間前、緋色を襲った男。

10年前、緋色の家族を殺した男。

その男が今、緋色と戦っている。そうとわかれれば——

デュナメスが駆け出し、標と刀も後に続く。
そして、玄関に手を伸ばした、その時――

斬

扉が斬られた。そこには、大量の黒い翼の少女――堕天使――と、それを引き連れるように立つ二人の瓜二つな堕天使の姿が。

「どきなさい！」

「そうはいかない。」

二人の瓜二つな堕天使のうちの一人が、デュナメスに剣を振る。それをデュナメスは簡単によけた。

だが、続けてもう一方が拳銃を構える。しまった――

だが、銃声は自分の目の前の堕天使の持つ拳銃からではなく、背後から聞こえた。当然それは、自分を狙ったものではない。目の前の堕天使を狙ったものだ。残念ながら、弾はかわされたが。

「デュナメス、貴女は先に行っていて！」

銃を構えた標が、彼女に言う。

「ありがとうございます、ラファエル先輩！」

背中から二枚の翼を洗わせて、彼女は飛び出した。「させるか！」
剣を持つほうの堕天使が、斬りかかろうと飛び上がる。

「それはこちらのセリフだ。」

「!？」

空中で、刀同士のぶつかる金属音が響く。

「邪魔はさせない。」

「邪魔すんな！」

刀と、剣を持つ堕天使のつばぜり合いが続く。

ダンッ！ 着地と同時に二人が同時にバク宙で相手から距離をとる。

「どうやら、緋色に会うにはこやつらを倒す必要があるみたいだな。」

「そうだね。」

刀と標が、たがいに手に持つ武器を構えなおした。

『さっさとやるよ!!!』

二人は一斉に反対方向に飛び出し、それを追うように、二人組の堕天使もわかれて、追いかけていった。

飛び立ったデュナメスを待ちうけていたのは、大量の堕天使たちだった。

「あなたたちにかまっている暇はないの!」

さらに加速させる。だが、数は圧倒的に相手の方が多い。こっちが一人だというのに、相手はなかなか容赦がなかった。

いっせいに、1000(!?) はあろう程の矢や魔法弾がとんできくる。

いくら頑丈なデュナメスといえど、矢が刺さった時や魔法弾が直撃した時に痛いのはほかの天使や人間と一緒に一緒だ。

「この量は反則でしょ!?!」

言いながら、光弾を放つ。一気に何百本もの矢や魔法弾が消滅した。だが、それでも残った矢や魔法弾はデュナメスがけて飛んでくる。当たる! そう思ったその時だった。飛んでくる矢に、横から矢が当てられたのだ。

「今のって――」

その通りだった。

『』『』『デュナメス様!!!!!!』『』『』『』

デュナメス部隊天使(×10)。そして、この矢を放ったのは――

『デュナメス様、さあ、早く!』

アンジェラ、アンジェロの姉妹だ。

「早く行ってください。ここは、私たちが喰い留めます!」

その瞬間には、あるものは弓矢で、あるものは魔法弾で、あるものは剣を用いて、矢の雨を消滅させていった。

「地上には落とさせません!」

「ですから、早く！」

「アンジェラ、アンジェロ——」

——ありがとう！

一言残して、彼女は天界へと急いだ。

ハルトとマルト

一方地上では、沢山の人間が逃げ惑う中、二組の戦闘がやや離れた場所で行われていた。

「なぜここにいる、マルト。」

刀は、目の前にいる剣を持つ堕天使――マルトに問いかける。

「簡単なこと。貴女達の邪魔をしに来ただけだ。」

そう言って、マルトは先ほどデュナメスに対して振り下ろした時より3割増しのスピードで自慢の剣――クリューサーオール――を振り下ろした。それを刀は、自慢の日本刀――スサノオ――で受けとめる。

その力を受け流し、その時に生じた力の反動を利用して、今度は刀が振り上げる。

それを、マルトはバク宙でよける。

「ふむ、なかなかの実力の様だな。これは楽しみだ。」

「……。」

ぎりりと、刀はてにもつ日本刀を強く握り直す。

相手までの距離は、ざっと50メートル。

一瞬の沈黙。永遠の時間。

それがいくらか過ぎた時、二人は同時に動いた。

そのほんの一瞬後に、カンッ！ と、金属のぶつかり合う音が響いた。

「さすがだな！ 私のスピードについてくるとは。」

「……。」

刀は何も答えない。とにかく、今は倒すことだけを考えればいい。その瞬間にも、すでに二人は27回剣を交えていた。

「どうした？ 私はまだまだスピードを上げられるぞ？」

「それは私もだ。」

さらに金属音の間隔が縮んだ。

「火剣——天羽々斬！」
ひけん アメノハバギリ

「飛剣——天馬誕生！」
ひけん ベガサスライド

二人が同時に技を叫ぶ。

一つは、日本刀——スサノオ——から朱い炎が浮かび上がり、衝撃波を生み、

一つは、剣——クリューサーオール——から黄金に輝く翼の生えた馬の姿の衝撃波が放たれる。

二つの衝撃波は激しいぶつかり合いを見せたが、それはすぐに終わりを迎えた。刀の放った『火剣天羽々斬』が、マルートの放った『飛剣天馬誕生』に打ち消されたのだ。

だが、それを刀は逆手に利用し、接近して斬りかかる。これほどの衝撃は同士のぶつかり合いがあった場所で動けるあたり、さすがは智天使^{ケルベ}、天使の中でも第2位なだけはある。

だが——それは、マルートには読まれていた。

「さすが——とはいっておこう。」

「っ。」

すかさず、さらに日本刀を振るう。それは、常人には避けることはおろか視認することすら難しいほどの速さだった。

だが、やはりマルートはそれをすべて避ける。

「速さは◎、狙いも◎、さっきの技の威力も十二分、普通の墮天使なら、戦うこと自体無理だろうな。」

だがそういいながらも、マルートは刀の攻撃をすべてよける。先ほどの技だって、あっさりと打ち破られたというのに。

「だが——正直すぎる。」

その瞬間、彼女の右下から、振り上げられようとする剣が見えた。くる！ 咄嗟に、刀は避ける準備をした。

そして——ドン。

左上から、重い一撃を受けた。

「かはっ!？」

口から空気が漏れる。予想していない一撃に、刀の身体がついてい

けていないのだ。

そこには、左腕を握り拳にしているマルートの姿が。

「右下に気を引けば、その通りに右下に集中する。では左はどうだ？ がら空きだ。」

その瞬間には、刀の目の前を剣が振り切られる。それを、刀は咄嗟にかわす。

その瞬間、

あろうことかマルートは剣を投げつけてきたのだ。「!？」

咄嗟に翼を現し、空中で態勢を立て直しながらその一撃をかわす。

——だが、若干間に合わず、わき腹にかすり傷が出来てしまった。相当の切れ味のその剣によってできた傷は大したことはなかったはずだが、出血が激しい。もし普通的美琴刀なら、これで死んでいるだろう。

ぐうつ……。鈍い痛みが、刀のわき腹を刺激する。どこから来てもいいように、彼女は日本刀を強く握り、出血のせいで若干鈍っているであろう意識を周りに集中させる。

「(どこから来る……?)」

意識を集中させ、辺りを見回す。

その時、真上から落ちてくる翼の生えた影に意識が反応した。「!」
反応はした——が、遅かった。

「正直者は、次に意外なところから来るものだと思うものだ。」

そういいながら、マルートは真正面から彼女の翼を切り裂いた。「
あああああ!」

背中に、激痛が走る。翼にだって、痛覚はある。こんな時、背中から直接羽が生えてくるタイプの天使は不便だと思う。

右の二枚の翼を失い、空中制御能力が著しく低下した彼女は、痛みと共に地上に落下した。

それを追うように、マルートが下りてくる。

ガンっ! 堅いアスファルトの地面にクレーターが出来上がるほどの勢いで身体から着地した刀に追い打ちをかけるように、マルート

がいつ取り出したかもわからない二本目の剣を左手に持ち、残っていた刀の左の二枚の翼を突き刺す。「――!?」刀の口から、声とは表現できない何かが音として発された。

「我々天使――私は墮天使だが――は羽根から武器を生み出す、その羽を狙うのは、ある種当然だろう?」

「ぐ……う……あ……!」

白い翼が、赤い血で滲んでいく。その染みが広がることは、すなわち刀の苦しみが大きくなるということ。

すでに、彼女の白い翼の半分が赤く染まった。

「苦しいか?」

「と……うぜ、ん……だ……!」

ぜえはあと息も絶え絶え、刀は反論する。

「そうか。」

それに応えるように、マルートは容赦なく剣を振りかぶる。

「ならば楽にしてやろう。」

ぶうん。風を切る音がやけに鮮明に聞きとれた。

「断る!」

霞む目で、相手の攻撃の起動を読み、日本刀――スサノオ――で受け止め――きれずに、吹っ飛ばされる。「うああっ!」

10, 20, 30――ついに100メートルは飛ばされたかというところで、家の壁を突き破り、停止した。ここは――緋色の家だ。

知らないうちに、こんなに家に近づいていたのか。

さて、どうしたものか。日本刀は先ほどの攻撃で根元から折れてしまった。

羽根を使いたい、すでに右の翼は斬り落とされ、左の翼は血にまみれボロボロにされている。これでは、きつと大したことはできないだろう。天使の武器は、その元となった羽の状態で強度や威力が代わってくるのだ。

そんなとき――あるものが目に入った。

ここに来た時に自分が持ってきた荷物のうちの一つ――愛用の木刀

だ。実は、これは誰にも言っていないのだが、この木刀には、彼女の好きな人の名前が彫ってある。

その木刀に近寄り、それを拾い上げる。

「（私に、力を貸してくれ——）」

木刀に掘ってある名前に頼むより早く、マルートが追いついた。

「——そのような木刀で私に挑むつもりか？」

刀は、何も答えない。体中が痛いのもあるが、理由はそこじゃない。とにかく、今は倒すことだけを考えればいい。

ぎりり、と、愛用の木刀を力一杯握る。

「……どうやら、本気の様だな。」

呆れや驚きといった感情の入り混じった表情だ。そうだろうな、ただの木刀で真剣を相手にするのだから。

「出血多量で、頭がイってしまったのか？」

「余計な御世話だ。」

「……そうか。」

かちやりと、金属の重い音が響いた。

「——残念だ。」

相手が、その剣を振り下ろした。

そして、剣は腹部へときまった。

『木刀が、マルートの腹部に決まった』のだ。

「な……！？」

斜めに振り下ろしたその剣によって斬られるのを避けきれず、刀は残っていたズタボロで血まみれの左の翼が斬り落とされたが、代わりに、真横に振った木刀はしっかりとマルートの腹部に決まった。

「ぐ……っ！」

腹部を抑えながら、マルートがさらに一撃を振り下ろす。それを、今度は完全に避けきる。

「なぜ。」マルートはきつこう思っているだろう。なぜなら、自分もそう思っているのだから。

どうして身体がここまで動くのか、自分でもわからない。

さらにマルートが一撃を振り下ろす。――甘い一撃だった。

「もらった!」

ブンッ、と、木刀が室内の空気ごとマルートを斬る。ただの木刀だから、実際は打撃攻撃でしかないが、確かにそれは空気ごとマルートを斬った。

「がっ!？」

空気がマルートの口からもれる。だが私は、攻撃をやめない。

「はああ!」

今出せる全力のスピードで、木刀を振るう。真剣より軽い木刀は、怪我をして鈍っている身体でも、十二分にスピードを出させてくれた。

驚くべきことに、この攻撃がすべて命中する。

実は、マルートが先読みできないほどデタラメに振っているからだ、そのことを刀が知る由はない。

「こ……の!」

マルートが、横に剣を振るう。

その下に刀が滑り込む。

最後に振り上げを使ったのは、間違いだったな。

刀は、全力を込めて木刀を握りしめる。

その姿勢は、剣術ではなく、野球のそれ。

いつの日かの素振りも、同じような体制だったか。

「これで、最後だ!」

持てる全力で、その野球バット同然の木刀を振り切る。

それは確かに、マルートの腹部へときまった。

「あ――がっ!？」

そして彼女は、勢いよく吹っ飛ぶ。

壁に叩きつけられたところで、彼女のフライトは終了した。そのま

ま、ずるずるとその場に力なく倒れる。

——やったぞ、緋色。

刀は、木刀に書かれた名前に、そう呟いた。

「——ソニアよ——」

廊下であった場所でうなだれているマルートが、天使の方の名で呼ぶ。

「なんだ？」

「とどめは、ささないのか？」

ああ、何だ、そんなことか。刀は一つ軽い深呼吸をして、

「無駄な殺生は、好まない。」

その顔には、自然と小さな笑みが浮かんでいたそう。

刀達が戦う場所から少し離れた所の空中、三対六枚の白い翼を広げる標と、同じく三対六枚の黒い翼を広げる墮天使が対峙していた。

「まったくさ、何で貴女がここににいるわけ？」

標もまた刀と同じく、目の前にいる拳銃を持つ墮天使——ハルートに問いかける。

「簡単なことよ。あなた達の邪魔をしに来ただけ。ま、邪魔どころか滅するつもりで来たけれども。」

ほとんどマルートと同じ答えをハルートが言い、先ほどデユナメスに対してはなったものより3割増しの威力の弾を自慢の銃——アグニー——から放った。それを標は、自慢の拳銃——アルテミス——から魔法弾を放ちかき消す。

舞い上がる爆発時の煙を目隠しに、一気に六つの拳銃を展開して、それを一度に放つ。それを、ハルートはバク天でよける。

「なるほど、相当の実力者とみた。これは心躍る。」

標は何も答えない。とにかく、今は倒すことだけを考えればいい。その瞬間にも、すでに二人は五二発の弾を放っていた。

そのやり取りをもし地上で行おうものなら、コンクリートとアスファルトの地面はあっという間に焼けて碎け散ることだろう。

「さすがはラファエル、生半可な攻撃ではビクともしないな。——でも、これならどうだ？」

「（！　くる！）」

標は——ラファエルは——知っていた。ハルートの武器『アグニ』が、超火力の炎の拳銃だと。

標は、今展開している6つの拳銃——アルテミス——を、自分の近くに寄せる。一斉射撃さえすれば、どんな威力の一撃でもおそらくはかき消せる。

そうたかをくくった時、ハルートが技名を叫んだ。

「angel's be Agnitiよous！」
天使たち　炎を抱け

次の瞬間、標の周り6方向——上下東西南北——から、強力な火の玉が放たれた。

「！？」

予想していなかったオールレンジ攻撃だ。今思えば、彼女の能力は自分と同じ射撃だった。アルテミスなら、自分と同じことが出来ても大しておかしくはない——が、この威力での一斉掃射は、予想をはるかに超えるものだった。標は、急いで残り22の拳銃を現し、それに対応する。

手持ち拳銃が2つ、先に展開していたのが6つ、そして今の22。合計30丁。真正正銘の彼女の操れる最大数の拳銃だ。

相手の放った銃の数は6、一つにつき5つの拳銃で押さえれば、なんとかなる。——ここまで、わずか0.3秒の思考。

「はっ！」

予定通り、一つの超威力魔法弾に対して5つ、拳銃から魔法弾を放

っ。

5つの銃口から放たれた魔法弾は一つの魔法弾となり、ハルートの拳銃から放たれた超威力の魔法弾とぶつかり合う。

たった一つの拳銃から放たれたとは思えないほどの威力だったが、なんとかそれをかき消す。

だが、かき消した途端、熱い何かが身体に直撃した。「え？」

——見れば、ハルートの手には一丁の拳銃が。そこから、煙が上がっている。

——ああ、そっか。私が30丁の拳銃を一度に使えるんだから、ハルートが6丁しか使えないわけがないんだ。

胸元には、ちょうどサッカーボールくらいの火の弾が。……熱い。そのまま、背中から勢いよくコンクリートとアスファルトの地面にたたきつけられる。

「あぐっ！」

熱とコンクリにサンドイッチされる気分は、最悪だった。

そんな標を、ハルートは静かに見下ろす。

「『angel's be Agniti^{天使たち}ous』をすべて打ち消^{炎を抱け}

すうえに、不意の一撃をくらってもまだ身体が無事なのはさすがだ——だが、どうやら、その数が限界の様だな。」

「あは……無事じゃないやい。」

まいったや、これはきつい。

だってさ、ハルートの周りには、手にあるのも含めて10丁以上の拳銃があるんだもん。それも、ぜんぶこっちに銃口を向けているなんてさ。

どうやって、勝つかなあ……。勝てるのかなあ……。

相手の銃口に、光が集まっていく。これでいつあの一撃が放たれてもおかしくはない。

あー……ちよつとヤバイ。焦点が合わない。あれ？ ハルートいたいいくつの拳銃を出しているの？

……これは勝てない。そうね、勝てない。

「(……でも……。)」

プロメテウス
「文化英雄の炎！」

ハルトの銃口が、今までのどの攻撃よりも光り輝いた。

「(私は……)」

負けもしない！

既に凶悪なほどの熱を帯びた文化英雄^{プロメテウス}の炎が目前まで迫っていた。
標はそれを、避けようとしなかった。

「!?!? 諦めたのか!?!?」

「そうだね、勝つのは諦めたよ。」

プロメテウス
文化英雄の炎が、標に直撃する。コンクリートとアスファルトでできた地面は、ひどい音を立てて焦げていった。まわりの家も、少しずつ焦げ臭いにおいを立てていく。もし私が熾天使^{セラフ}でなければ、今頃とっくに黒焦げだろう。

「勝つのは……?」

「そ……勝つことは、諦めたよ……。」

熱線によって溶かされないように、必要最小限の力を使って身を守る。

「でもね……。」

ハルトに聞こえるか聞こえないかほどの小さな声で、標が呟く。
その間にも、彼女の愛用の拳銃^{アルテミス}がハルトに近づく。

「……負けないよ。」

「! しまった!」

だが、ハルトが気づいた時には、もう手遅れだった。
かちやり

背中に、幾つかの銃口がつきつけられる。

チェツクメイト
「――bang――」

標が小さくつぶやく。

零距离射撃が、しつかりときまった。

「あ——がっ!？」

直撃を受けて、ハルトが落下していく。さすがに、あれだけの銃口からの魔法弾を零距离で受ければ——

おかげでなのかは知らないが、文化英雄プロメテウスの炎が消えていく。

……熱かったなあ。……動けないや。

……ま、いいか。あハルトつちも多分、動けないしね。

「あいたたた……。」

ほとんど動かない身体に無理を言って、なんとか起き上がる。本当に、よく動けるもんだと思うよ。

「さて……。」

彼女の横には、倒れたハルトが。

「(ちよつと、やりすぎたかな……。)」

特に彼女に恨みはないのだから、殺す理由もない。だからこうして滅さなかったわけだが——少々、やりすぎた気がしないでもない。

「——う……ぐう……。」

あ、おきた。思っていたよりずっと早い。

「……生き……てる……?」

「そうだね。」

「……なぜ、滅さなかった?」

「できなかっただよ。」

一息ついて、けらけら笑いながら標が答える。

「……。」

ハルトはぬらりと立ち上がり——立てるの!?

「この……!」

かちやり、と、拳銃が額につきつけられる。え? なんで?

こっちは——できれば能力は使いたくないのに。

でも、彼女はそんなことはお構いなしだろう。

そのとき、

「そこまでだ、姉上。」

ハルトの背後に、衣服が乱れたマルトと、全体的に血まみれの刀の姿があった。おそらく、私たちより先に戦闘が終わったのだろう。

「マルト……!？」

「もうやめておけ、姉上。私たちの負けだ。それを受け入れろ。」
「……っ。」

少しの間、自分の拳銃を見つめ、その後

「……ふんっ！」

思いつきり、睨まれた。負けたのが悔しいのか。

「――すまない、マルト殿。」

「なぜ貴女が謝る？ ソニアよ。むしろ、謝るべきはわたしたち姉妹の方だ。――すまなかった。」

そう言ってマルトは片膝をつき、刀に頭を下げた。ハルトは――そんなそぶりは一切見せない。

まあ、別に謝らせるために生かした訳じゃないから、いいんだけどね。

それより――

「刀……まだ、やれる？」

「そちらこそ。」

お互いがお互いの姿を見る。

刀の姿は――全身に剣で斬られた跡が見え隠れしていた。よく見ると、背中にはべったりと血が。

「本当に、刀、大丈夫？」

「私は大丈夫だ。」

「そっか。……なら、こっちも大丈夫だよ。」

二人は、同時に空を見上げる。この空高くで、今も緋色が戦ってい

る——そう思うと、今すぐにでも飛んでいきたい。

「標——頼みがあります。」「なにかな？」「私は、戦闘中に翼を失いました。そのため、まともに飛ぶ事は出来ません。ですので」

「連れて行ってほしい、と。」

こくん、と、刀がうなずく。

「お安い御用！」

一人も二人もきつと変わらないさ。

もう一度二人は、空を見上げた。

そこでは、いまだに墮天使対デユナメス部隊（×10）の戦闘が行われていた。

さて、見栄張ったんだから、無理はしないとね。

「あーもー！ あと何人ー！？」

アンジェロが悲鳴に近い叫びをあげる。

その間にも、愛しのお姉さまは高速で弓を撃つ。

「アンジェロ！ 叫ぶより今は弓を！」

「はい！」

愛しのお姉さまの名とあらば、いくらでも弓を撃ちましょう！ おらおらおらー！

次々に、墮天使たちに命中していく。どうかしら？ 私の弓の力もなかなかでしょう？

私やお姉さまはもちろん、他のデユナメス部隊の天使たちも、各々の武器でどんどん墮天使を倒していく。さらに、倒したことによって正気を取り戻した天使のうちの何人かが加勢してくれているおかげで、大分と数は減った——が、それでもこちらのメンバーは20前後、それに対して相手はまだ500はいるだろう。はあ、先はまだまだ先ね。

「あぶない！」

「え？」

お姉さまの声が届いた時には――すでに体に衝撃が走っていた。
魔法弾が身体に直撃したのだ。

この一撃を受けても衝撃が走る程度だって言うことは、放ったのは
天使^{アングロス}クラスかしら？　――それでも痛いわね。

余程きれいにヒットしたのか、空中で錐揉み回転しながら、アンジ
エロは落ちていった。

あれ……？　力がうまく入らない？

どンドン、高度が下がっていく。

ああ――下はアスファルトとコンクリートの塊――これはまずいか
も……。デュナメスさんとかならともかく、私、階級は権天使^{アルケイ}で第
7位しかないから、コンクリの地面とか、痛いなんてものじゃ済ま
ない――

ぽふん。

何か、やわらかいものに着地したようだ。

「大丈夫か？」

そこには、さっき家の方にやってきた堕天使のうちの一人が――

「！？　な、なんで堕天使が私を助けたの？！」

だが、堕天使は答えない。

「離せ！」

「飛べるなら。」

「飛べるわよ！」

叫びながら、羽ばたく。そういえば、今はちゃんと飛べるや。

私が飛んだのを確認すると、その堕天使は右手に剣を構え、私とは
反対方向にいる別の堕天使目掛けて飛んでいき、そして――斬った。
だが、明らかにその一撃は手加減されている。相手の堕天使が天使
に戻る程度に。

「――味方、なの？」

「どう解釈してもらってもかまわない。信じられないなら、私の背
中を撃てばいい。」

そういいながら、さらに彼女は2人3人と堕天使を天使に戻してい

く。

——本当に味方？

ううん、違う、あくまで敵！　そうよ、こんなこととして許すと思っ
たら大間違いよ！

だがアンジェロは、その背中を撃てなかった。

「マルート、なぜ私までこんなことを？」

「黙ってやるです、姉上。」

ちっ、めんどくさいわね、加減するのって簡単じゃないのよ？
などとぶちぶち文句を言いながらも、マルート以上に墮天使を天使
へと戻していくハルートだった。

「しっかりつかまっついていてね！」

「承知。」

墮天使姉妹がアンジェラ部隊と合流したところ、ややその戦闘空域か
ら離れたところを、標が刀をつかんで飛んでいた。

正直、辛い。

だが——緋色がまだ戦っているのだから、急がないと！
急かす思いは、簡単に彼女の速度に比例してくれた。

天使と墮天使

「はあっ、はあっ、はあっ……。」

相変わらず、ルシフェルの野郎は化け物だ……。

たった2週間だったとはいえ、僕も結構体を鍛えたし、実際、強くなった。

それでも、まだルシフェルには敵わない。

「ん、確かに強くなったね。創造の強制を4つ解放したのかな？」
大正解、正解者には――

「はあっ！」

武器精製能力による投げナイフをプレゼント！

だが、それをルシフェルはさらりとかわす。

「うんうん、コントロールもなかなか。」

だったら当たれよ。緋色は、ぎりりと歯を噛みしめる。

「んじゃ、こっちからはこんなものを。」

そう言っつてルシフェルは、黒弾を放ってくる。

「こんなもの！」

それを緋色は、光弾でかき消す。

「そうそう、それくらいできるんだからもっと楽しませてくれよ？」

折角俺が10年も前から目をつけていたんだから。」

10年前？――ああ、そういえばこいつは家族の敵だったな。改めて意識すると、どんどん怒りが込み上がってくる。

どくん、と、大量の血が流れる感覚がした。

そして、パキン、と、何かが切れる音――これで、5回目か。力が湧いてくる。

その緋色の背中には、1対の輝く翼が。

「へえ、5回目の解除おめでとう。」

心にもないことを――まったく、

「はっ！」

手に、標のそれと同じ拳銃を出現させ、発砲する。

「いいねえ、それくらいこなくっちゃ!」

言いながら、ルシフェルは飛びあがる。それを追うように、緋色も飛びあがる。

「そうだ、こんなのはどうかな?」

ルシフェルが、掌を向ける。その掌は、青黒く輝く。

「――津波――」

瞬間、まるで空で津波が起きたかと思うような程の衝撃波を連発してきた。

「うあああ!?!」

慣れない飛行の緋色には、地面に押し返されるのに十分なものだった。

ヤバい……着地できない!

耐性を立て直せない。このままでは――

そう思ったその時、どこから影がさっそうと現れ、緋色を受けとめた。

「間に合った!?!」

「デュナメス!?!」

そこには、輝く1対の翼を広げ、少しだけ荒い息をするデュナメスの姿が。

「どうしてここが?」

そのままだと男として恥ずかしいので、降りながらデュナメスに聞く。

「ヒロたちの匂いは分かりやすいのよ。」

あ、そういえば天使は気配のことを匂いって言うんだっけ。

「それでここが?」

「そ! さすがに、ルシフェルと一対一なんて無謀すぎるからね。おっしゃる通りです。」

「だから、ヒロはいったんそこで休んでいて!」

「は?」

それだと今度はデュナメスとルシフェルが一对一になるんじゃない——
なんて当然のツツコミも、スルーされてしまった。デュナメスは、
ルシフェルに向かって突進する。

「はっ！」

そのまま、見事な飛び蹴りがルシフェルの顔面をとらえた。ルシフェルは思わずのけぞる。

「つて……さすがは解放^{エデン}、適当な力しか発揮できていない創造^{アトム}な
んかよりずっと強いな。」

「褒めても、蹴りしか出ないわよ！」

素晴らしいながら、デュナメスは思いつきルシフェルの腹にパンチを決めた。「蹴りじゃねえ！」ルシフェルが、キャラを捨てて突っ込む。

だが、デュナメスは容赦なくさらに腹にパンチを連打する。一発一発がかなり重いのが目に見えてわかる。

「はあっ！！！」

思いつき振りかぶり、^{フィニッシュ}トドメの一撃。それを喰らい、ルシフェルが思いつき跳んでいく。

おいおい、デュナメスさん、ひどいじゃないか。

「なんで、この前ルシフェルが来た時には戦ってくれなかったのさ。」

「

まさかデュナメスがここまでルシフェルを圧倒するとは思っていなかった。だからこそ、なぜこの前手伝ってくれなかったのか。これだけ強いなら、この前のうちにルシフェルを倒すことだって——
そう思ったところで、彼女が答えた。

「ヒイロ、周りのことも考えてね？ 私の本気を出したら——多分あの辺り一帯は大変なことになっていたわね。」

「……なるほど。」

そういえば確かに、彼女はかなり派手に殴り飛ばしている。もしこんなことを家でやれば、周りも巻き込んで家が崩壊しかねないだろう。

――すでに家の周りで戦闘が行われ、案の定そこらじゅうに穴が出来ていることは、緋色は知らない。――

「分かればよし！」

そう言って、彼女また、ルシフェルに突進していった。

「つててて……あ？」

ルシフェルが起き上がると、すでに目の前にはデュナメスの姿が。その右の拳は、すでに最大まで降りあげられている。

「こっんの！」

咄嗟に、黒い波動津波ソアを起こす。

「！？ きゃあああ！」

デュナメスはそれに直撃して、見事に振りだしにまで戻っていった。

「デュナメス！」 創造アトムの少年が叫ぶ。

「はっはっは！ そうそう、面白くなってきたじゃねえか！」

両腕に、黒い波動を集める。「それでも喰らいな！ 避けられるものなら、避けてみる！」

それを、空高く放つ。その黒い波動は空で花火の様にはじけて、無数の黒弾に姿を変える。

「こんなもの！」

創造アトムの少年が、巨大な傘の様なものを創造する。だが、そんなもんじゃこの豪雨ラグナロクは防げねえぜ？

げらげらと、下品な笑いは、しかし自身の放った豪雨ラグナロクの雨音にかき消された。

「こんの……！」

大きな傘を広げ、豪雨に負けないように踏ん張る。

だが、最初こそ傘も踏ん張ってくれたが、すぐに傘は駄目になってしまった。

雨漏りの原理で、緋色たちに被弾する。『うあああああっ!』
二人の絶叫もまた、豪雨^{ラグナロク}にかき消されていった。

「さあって、追撃、と。ふはは、避けるなり受け止めるなり掻き消すなりしろよな？」

笑うルシフェルの手には、巨大な、禍々しい妖しい光を放つ巨大な矢が。

それを、すつ、と、豪雨に飲まれる緋色たちに向ける。

アボカリプス
——終末——

それが、この矢の名前だ。

その名の通り、当たれば終末へと向かわせるほどに強力な矢である。それを、ぎりぎりと引っ張り、いつでも放てる状態にする。

「はっはあ!」

そして、つかむその手を離したとき——

矢が二つに裂かれた。

「!?!」

そこには、刀傷だらけの少女が一人。

手には、長大な日本刀が一本。

それを握る少女は、さらにそのままルシフェルに斬りかかっていく。その日本刀は、少しだが、しかし確かに、ルシフェルに刀傷を生んだ。

「こ……の!」

反撃しようと、斬りかかってくる少女に対して腕を振る。

だが、少女の動きはルシフェルの思っていたものより、圧倒的に速かった。

「ちっ！」

さらに速く腕を振ったが、少女はバク宙でそれをかわした。
ザッ　しっかりと足場を踏みしめた少女――刀は、対峙する相手を、
睨みつけた。

bang!

黒弾の豪雨に打たれる緋色とデュナメスの鼓膜に、銃声音が響いた。
そこには、ボロボロになりながら銃を構える少女が。

「早く行って！　刀がやられる前に！」

黒弾の雨に負けないほどの量の銃を操り、彼女は叫ぶ。とつくに限界まで身体を使ったというのに、操れる限界量をはるかに超えたその銃を操ることは、もはや無謀だろう。

だが、彼女はその無謀を選んだ。

勝つために。

緋色のために。

「……ありがとう！　すぐに終わらせる！」

デュナメスの手を握り、黒弾の豪雨と魔法弾の一斉射撃がぶつかり
中を緋色が駆け出す。

いいなあ、デュナメスは。

ひっそりと、標が呟いた。

「この女が！^{アマ}」

日本刀を握り、何度も立ち向かう刀に、ルシフェルはいら立ちを隠
そうとはしなかった。

腕を振ればそれより速く動き、黒弾を放てばそれはあっさりと切り
裂かれる。

だが、それもここまで。

「おらあっ！！」

ガンっ！　ルシフェルの腕が、しっかりと刀に命中した。

「が——っ！」

肺から空気が漏れ、勢いよく吹っ飛ばされる。

「はっはああ！ こいつでおさらばだどつと死ねえ！」

もう一度ルシフェルは、アボカリプス終末を構える。

そして、その手が放されると同時、ルシフェルが吹っ飛んだ。

「のああっ!？」

間拔けな声とともに、ルシフェルが地面にころがり落ち、アボカリプス終末も消え去る。

「刀。」

そこには、二人の姿が。

緋色と、デュナメス。

「——助かった、緋色。」

「刀、標を手伝ってやってくれないか？ あのままだと標、頭痛で倒れてしまうから。」

緋色は覚えていた。限界数を超える拳銃の操作は頭痛を起こすと。

「——承知。」

本当は、緋色といたかった。

だが刀は、そんなことは一言も言わなかった。この勝負を済ませてから、また会えばいい。

それだけだ。

緋色が駆け出すのと、刀が駆け出すのは、同時だった。

『はっ!』

緋色とデュナメス、2人が同時に掌から光弾を放つ。

「——あーもー、いいわ。」

それを、ルシフェルが避けた。避けたのだ。

「そろそろ、本気だしてもいいよな？」

声色が変わった。

その瞬間、言いようのない、今まで感じたことのないほどの異様な

プレッシャー

緊張感を感じた。

だが、緋色もデュナメスも、臆することなく立ち向かう。

「はあっ！」

緋色が、武器精製能力を使って、刀の日本刀——スサノオ——を出現させ、斬りかかる。

だが、それはルシフェルに届く一歩手前で、粉々に砕け散った。

初めて家にこいつが現れた時に刀の日本刀——スサノオ——がそうなったのと同じように。

「な……！？」

「まさか……！」

デュナメスが、わなわなとふるえる。

「何か知っているのか？ デュナメス。」

だが、デュナメスが答えるより早く、ルシフェルの拳が緋色の腹に直撃した。

触れたその瞬間、

バキバキバキ！ いやな音が響く。

「……っ！？」

アバラが何本か折れたのだ。

「あ……ぐ……！？」

ほとんど、ルシフェルは触れただけだったのだろう。現に、緋色も殴られたという感覚はない。せいぜい小突かれたというレベル。

だが、それだけで緋色のアバラが何本か折れたのだ。

『——破壊——』
カタストロフイ

デュナメスとルシフェルの声が重なる。

「これが彼の能力……自然災害なんて、彼の能力の一部にすぎない。彼が本気になれば、触れただけでそれを壊せる……。」

デュナメスが、カタカタと震える唇から声を出して説明する。

「だから誰も、彼には勝てない……。」

確かにそうだ。

今まで能力をまともに使っていなかったというのなら、その状態で苦戦している僕たちに、勝機があるのか？

いいや、無いね。残念ながら。

苦しい。

アバラの骨が折れて、うまく息が出来ない。この様子だと、アバラ以外にもやられたかもしれない。

その間にも、コツコツとルシフェルが近づく。

「――ヒロには近づかせない。」

「デュナメス――まさか……！？」

そのまさかだった。

「うあああああ！」

彼女は、無謀にもルシフェルに突撃したのだ。

「や、やめろ！」

だが彼女は、聞く耳を持たない。くそ、止めたくてもまだ回復は済んでいないぞ！？

「あああ！」

彼女の拳が輝く。解放^{エデン}によるものなのか、はたまた別のものなのかは知らないが、力強く輝いた。

だが、その輝きは、ルシフェルには届かない。

それどころか、またも骨の碎けるような音が響いた。

その碎けると同時に、デュナメスが吹っ飛んでいった。

デュナメスが吹っ飛ぶのと同時に、緋色の4つ目の強制解除^{リミッターブレイク}によって思い出した力、『肉体再生能力』による骨の再生が終了した。

骨の再生と同時に、緋色は吹っ飛ぶデュナメスを受けとめるために、駆け出した。

どん

地面に着地する寸前、緋色はデュナメスを受けとめることに成功し

た。

「大丈夫か、デュナメス！」

「ひ、ヒイロ！？ え、あれ！？」

痛みより、僕がダッシュしたり人一人を受けとめたことに驚いているようだ。よし、それだけ余裕があるなら大丈夫。

残念ながら、まだ僕は人の身体まで修復することはできない。

だから、「デュナメス、今度は君が休んでいて。」

さて、休んでおいてと言ったものの、どうやって攻撃を当てようかとあえず、直に触れるのはヤバいから、光弾でも放っておこう。

「はっ！」

まずは試しの一発。

直撃——と思ったが、よく見たら触れる直前に爆発していた。

「はあああはっはっはっはあはっは！」

——うわー、ちょっとヤバめの笑い方してるよあの男。狂気しか感じない。

「はっはあああっ！」

右手から、光弾を放ってきた。それだけなら、先ほどの戦いと変わらない——が、この光弾……何か……違う……！

異常を感じて、急いでそれを避ける。

「……！？」

黒弾が通り過ぎた所を見て、緋色は驚きを隠せなかった。

まるで、空間をえぐり取ったような、そんな光景が、黒弾が通り過ぎた所に残されていたのだ。

息を呑む。

そんな単語が、頭に浮かんだ。まさしく、その通りだ。

当たるとヤバい。

そんなの、これを見れば誰だってわかるだろ？

そんなものを、ルシフェルは乱射してきた。

「うわっと!？」

下手に避けるも、下手に動かないのもできない、デタラメなように計算された動き。さすがはルシフェル、狂っているようでそうでもないのかもしれない。

「おらおらおらあっ! はっはあはああ!」

——やっぱ狂ってら。

ほんと、どうやってかとかなあ……。

そう悩んだ時——

「ヒロ!」

デュナメスが、叫ぶ。

「勝つ方法——あるよ。」

どうやら、僕の悩みも解消されそうだ。

これを使うしか、彼には勝てない——少なくとも、今のアタシ達じゃ。

でも——できれば、使いたくなかったかな。

でも、ね、使いたくないっていう気持ちより、『勝つ』って気持ちが——ヒロのためになるって気持ちが、勝っちゃったんだもん。だったら、仕方ないよね。思っちゃったんだから。

「勝つ方法?」

「そう! だからそのためにも1分時間を稼いで。」

「ドラ○ンボールみたいに1分経っても出来ないとかは無しな!」

「当然！」

おい、そうときまれば、時間稼ぎだ。

まず、あの空間削除黒弾をデュナメスに当てないようにしないとな。こういうとき、僕が囷になったら、デュナメス目掛けて撃つって事になりそうだから――

「こうするべきだよね！」

「きゃ！？」

僕は、デュナメスを抱き上げ、創造^{アトム}の力を脚力に可能な限りまわし、全力で逃げまくることにした。

「とにかく逃げるから、とにかく急いで！」

「わ、わかった！」

応えるデュナメスの顔は、少し赤みがさしていた。

あと40秒

黒弾から逃げまくるのも、なかなかつらい。

だけど、泣き言なんて言ってられない。このままだと、僕は確実に消滅させられる。

だからとにかく走る。走って、走って、走ればいい。

あと30秒。

急に黒弾の数が減った。疲れてきたのか？ そんな僕の願いともいえる予想は、的外れだった。

「――津波^{ノデ}――」

両手に黒い光が集まり、それを思いっきり放ったのだ。それを、僕は背中受けてめる。デュナメスにダメージが届かないように。

「ヒイロ！」

「僕は大丈夫だから……とにかく、急いで……！」

がんばって笑って見せるが、結構痛いなこれ。

あと20秒。

津波も治まり、今度こそ疲れたのか？ そんな僕の切実な願いは、的外れだった。

両手に黒い妖しい光が集まり、それを大空高くに向けて放つ。

その瞬間、幾つもの黒弾が雨の様に降り注いだ。

「――!?」

それをかわすのが困難なことくらい、理解している。

その時――

bang

銃声が響き、さらに銃声が響き、とうとう銃声しか聞こえなくなつた。

「緋色。」

そんな銃声の中でも、幼馴染の声はしっかり聞こえた。

「緋色には、当てさせないから、安心して!」

「標……ありがとう!」

今度、彼女の好きなものでも奢ってあげないとな。

あと10秒

ラグナロク

豪雨の向こうで、ルシフェルが巨大で妖しい輝きをする矢を構える。

「ははははははは、あはははははは!」

その矢が放たれると同時に、矢が二つに裂けた。

「!?!」

斬り裂いたのは、当然――

「緋色。」

「ありがとう、刀！」

だが、その彼女は膝をつき、その場に倒れてしまった。「刀!？」

「緋色……あとは任せた。」

彼女の限界が来たのだ。

あと5秒

急にぴたりと、黒弾の雨がやんだ。

それと同時に、今までで感じたどんな感覚よりもしゃべりな感じが、僕に緊張感を与えてきた。

見れば、ルシフェルの目の前には、今までに見たどんな黒弾よりも大きな黒弾が。

「――破滅――」
カタストロフイ

おそらく、それが彼の最後の技だろう。

そして同時に、最強の技だろう。

それは進んでいった場所の空間を消していき、真っ黒な、宇宙の様なものだけを残していった。

「――!？」

かわせない。

そう悟った、その時。

「緋色――」

「標……?」

目の前に、標が立ち――

「私は、道標。今日はあなたの道標。私が、あなたの道の標になる。」

何を、言っているんだ?

ただ、嫌な予感がする。物凄く、ものすごく。

「――緋色。好きだよ。――ずっと前から。」

――は？

予想していなかった答えに、僕の頭の上には疑問符【クエスチョンマーク】。

だが、おいてけぼりな僕をよそに、彼女は黒弾に突っ込んでいった。

「し、標!？」

「はああ!」

大きな、今までのなかで一番大きな翼が、標の背中から現れ、黒弾に特攻を仕掛ける。

人間でもなんでも、死ぬ直前が一番美しいというけれど――その時の標の翼の美しさは、忘れない。

触れる

絶望。

そう思った、その瞬間――

――0――
ゼロ

一瞬、何が起きたのか理解が出来なかった。

物凄く強い輝きを感じたと思えば、今僕は、過去を見ていた。

これは、今から10年前のことだ。

「おーっ！」

——その日僕らは、世間一般に言うピクニックに来ていた。お父さん、お母さん、標、それに僕。

空は青く晴れ渡り、気候もよく、気温も適温、絶好のピクニック日和だ。

車で約30分の所の自然公園、人口芝生の堅い感触、お昼に食べたお弁当のおにぎりの中身はおかだったわけ？——

——ああ、今頃思い出したよ。あのときの芝生の感覚、おにぎりの味。思い出って、一度思い出すと、こんなふうにいるんことを思い出すんだなあ。——

——日も傾きだし、太陽が放つ日の色が夕焼け色に変わったころ、「おトイレー。」なんて今さらのんきに、僕はお手洗いへと駆けていったんだわけ。——

「お？」

——ああ、そうだ、確かここで、彼女に会ったんだ。

人口の芝生の上に立つ、悲しそうな顔の少女に。——

「どーしたのー？」

「え？」

——そうそう、初対面なのに僕、いきなり馴れ馴れしく話しかけたんだわけ？　こういうことは、小学生の低学年までが許されることだよなあ。——

「どーしたの？　なんか、すごく悲しそうな顔しているよ？」
「そ、そんなことは、ありませんわ……。」

——今思えば、昔の方がずっと鋭かったんじゃないだろうか？　この時僕は「嘘をついている」って、子供ながらに確信したんだっけ？　——

「ねえ、なにかあったの？」

「なんでもありません！」

それでも、彼女のほほには涙が伝った。

「泣いているじゃん、悲しくないのに泣いたりしないよ？」

「な、泣いてなんて……。」

それでも、彼女は泣いていた。

「うん、決めた！」

「——え？」

——涙をこらえている彼女を見て、僕はこう決意したんだっけ？　——

「僕の名前は美菜乃緋色、みんなのヒーローになる男だ！　そのみんなの中に、お前も入れてやる！」

——この時のぼくにとって、みんなとは家族や標たちだけだったんだろうな。だから、こんなことを言った。これが僕にとっての特別だから。子供の夢って、何でもあるだよなあ。誰かが泣いているのを見て、それがつらくってこんなことを言うんだもん。——

「——本当？」

「うん！　だからもう泣かないで。」

——いつだったかに聞いた話だけど、この時の彼女は、自分の持つすごい力に気付いていなくて、落ちこぼれの烙印を押されていたらしい。——

——だから彼女は喜んだ。誰も相手にしてくれなかった自分を、一つの輪の中に入れてもらえることが。——

「じゃあ——約束して。絶対に、私のヒーローになるって。」

「うん！」

そう言って僕らは指きりした。

この時、緋色に眠る力——創造^{アトム}が、彼女の眠れる力——解放^{エデン}により目覚めたことを知る者はいない。

——すごいな、昔の僕。まだ彼女から名前も聞いていないっていうのに。……そうだった。今から聞くんだったな。——

「そういえば、まだ名前聞いてなかったな。なんていうの？」

「——アタシの、名前はね——」

——デュナメスⅡノーブル・ヴァーチェス——

「ばいばーい。」

——僕は手を振り、彼女に別れを告げた。

また会うという、あてのない約束だけを残して。——

——その、帰りだ。——

「——へーえ、数100年に一度現れるっていう創造^{アトム}——今回はあ

の少年かぁ。おお、こわいこわい。――だからさっさと殺しましよ
う♪」

「おかーさん、あのね、あのね。」

――ノイズ交じりに聞こえてくる声。夢で聞いて以来だな。――

「僕ね、ヒーローになるんだ。」

――ああ、そういえばそんなことを小学校の作文に書いていたっけ？
みんなのヒーローになるって。――

「そうね、あの子と決めたんだ！」

――あの子――今なら分かる。これが彼女を指すのだと。デユナメス――

「あのね――」

――だけど、それ以上を聞くことも言うこともかなわない。あの男
が、攻撃を開始したからだ。――

道路の上空、そいつは黒い6枚の翼を広げて、いきなり攻撃を仕掛
けてきた。

そこから先は一瞬のことだ。だがその一瞬で、いろんなことが起き
た。

まず、道路に雷が落ちた。雲ひとつない夕焼け空から突然だ。見れ
ば、空の一部分に異様な黒い雲が浮いている。

それに伴い立ち往生。続けてもう一発、今度は竜巻が車を襲った。

それはあつという間に車の外装を剥ぎ、中から僕らを引きずりだした。

異常を感じた僕らは、すぐに走りだした。だが、突然の地震で足元がもつれてこけてしまった。

こけ方が悪かったのか、標は頭を強くこすりつけてしまった。

小さな黒い球が、雨の様に降り注ぐ。それは標を、僕を、そして、僕の両親を傷つけていった。

「バイバ〜イ♪」

とびきり大きな黒い球を、男が放つ。

——死ぬ。子供ながらにそう実感したその時だった。一瞬だけ、僕の能力が発動した。——

光弾が黒弾を打ち消し、あたりに光の粒子となって霧散していく。

「げっ、もう目覚めたのか？」

——驚く両親をよそに、僕はもう一発、光弾を放った。その時の限界で。でも——

「うわっ!？」

直撃する。だが、

「——なんだよ、ビビらせやがって。」

——効いていなかった。僕の記憶があるのは、そこまでだ。僕はそこで、気を失ったのだ。——

これは、今から10年前の出来事だ。

目が覚めるような感覚とともに、僕はすべてを思いだした。
昔、あの事故の時のこと。
そして——創造^{アトム}を。

ダン

いまいるところから、僕は駆けだし、その瞬間には、標を抱きかかえていた。

あのほぼ零距离から間に合うあたり、さすがは創造^{アトム}の力だと、自分の能力に感心する。

「ひ……緋色なの？」

「？ 何か、顔についている？」

「——ううん、なんだか、雰囲気か——」

そこで標は声を失った。

緋色の背中から、12枚の翼が現れていたのだ。

さらに、デュナメスは光り輝き、長大な2枚の翼を広げていた。その大きさは、今この場をおおいつくすほどはあるだろう。

——エデン完全開放——

これが、彼女の切り札だった。

その場にいる味方全員の潜在能力を実数値の何百分も発揮させる。

——そう、理解はしているが、使ったことはなかった。
なぜなら——

「じゅ……12枚……だと!？」

ルシフェルは、驚愕した。

翼の枚数は、その天使の階級や実力に比例する。

だが、12枚などという例は存在しない。

だが、単純に考えても、天使の最高階級である熾天使セラフが6枚なのだから、その2倍——圧倒的なものだ。

「ルシフェル——悪いが——倒させてもらう。」

創造の少年がそう呟いたかと思えば、その時にはルシフェルは殴り飛ばされていた。

「(な……!?)」

なぜ触れることができる——!?

今の俺は、触れるより先に骨が碎けるんだぞ?

触れることなど、できるはずが——

思考が高速に達した時、もう一発、ルシフェルは殴り飛ばされた。

創造アトムの完全な制御。

たった10年前のあの日のことを思い出ただけで、ここまでやれたのだとは、正直思っていない。

むしろこれは、デUNAメスのおかげだろう。

「はあっ!」

3発目の拳が、ルシフェルに決まる。

圧倒的。

それが、創造アトムの力に対しての素直な感想だ。

「くそつたれえええええ!」

怒りにまかせて、ルシフェルが巨大な黒弾を放つ。

それを、光弾で撃ち消す。

今までの僕の実力じゃ、こんなことはできなかっただろう。

「はあっ!」

4発目。

「はあっ!」

5発目。

「はああああっ!」

6発目がルシフェルに命中し、ルシフェルが遠くへと吹っ飛んでいった。

「く……そが……！ これでも喰らいやがれ！」

そう叫び、巨大で禍々しい光を放つ矢を現し、それを撃つ。それを、緋色はつかみ、投げ返す。

初めてデュナメスにあった日に戦った、アンジェラに対してやったように。

それが、ルシフェルの身体を貫く。

「が……っ！」

貫かれた体はすぐに再生をはじめ、あっという間に元の身体に戻った。

それと同時に、僕の拳がルシフェルを貫いた。7発目！

「が……っ……！？」

「悪いけど、容赦はしないよ！」

さらに右膝蹴り。8発目！

その勢いで、もう一度ルシフェルが吹っ飛ぶ。

きっと、ルシフェルには僕が悪魔に見えるだろう。

いいさ、悪魔になってやる。

「——はっ、ははは！ これで……これでどうだ！？」

そう叫ぶルシフェルの腕には、ぐったりとした刀の姿が。

「緋……色……。」

なるほど、これが噂の人質ってやつか。確かに、卑劣だな。

「優しい優しい創造^{アトム}の貴方様なら、この娘のためにどうするべきか

——」

「黙れ。」ルシフェルが言い終わるより早く、僕が動き出す。

ダン

その瞬間には、すでに腕ごと刀は僕の腕の中にいた。

「なっ……！！？」

「9発目。」

千切れたルシフェルの右腕から、鮮血がほとばしる。

その血がまるで人の腕の形を形成したかと思えば、ルシフェルの失った右腕が再生された。

それが、甘かった。

ズボッ！

そんな擬音が今にも聞こえてきそうだ。

カタストロフィ 破滅の中心から、アトム 創造の少年が現れたのだ。

「な……！？」

カタストロフィ どうやってこの破滅を打ち破ったのか！？

ルシフェルのそんな疑問は、しかし口にはできなかった。

「10 発目——」

アトム 創造の少年の右手が、眩しすぎるくらいに輝く。

「これで——最後だ！」

その一撃は、ルシフェルの顔面にねじ込まれた。

ドン

何かが何かにぶつかる、この激しい音は、ルシフェルが地面に落下した音だ。

——勝ったのだ。

「これで……終わり……——じゃ、無いな。」

アトム 創造の力というのは、不思議なものだ。今別の場所で起きている現実が、目に見えて解るのだ。

ルシフェルが倒れたことにより、地上で戦っていた堕天使たちは一斉に元に戻り、戦闘が終了した。

だが、戦闘による被害は、ルシフェルが倒れた今でも変わらず、色濃く残っている。

「——うん。」

理解は、している。

天使の能力は、基本的に無限にわいてくる。

しかし、溜めこんでおける量には限界がある。

要は、幾らでも補充が出来る水の入ったコップだ。

天使はそのコップに入った水を使って能力を発動する。

普通なら、使う水の量は少しだから、すぐに補充できる。

だが——今から僕がやろうとしていることは、そのコップの水をすべて使う大仕事だ。

天使は、コップの水がなくなると、二度と天使としての能力が使えなくなる。泉の水が枯れるように。

そして——天使でも、墮天使でもなくなる。

それを承知で、僕は今から、このコップの水をすべて使おうと思う。

——いいじゃないか。

これで僕の能力がなくなろうと、いつも通りの生活に戻るだけだ。そうだろう？

12枚の翼を大きく広げ、創造^{アトム}を発動する。

12枚の翼から放たれる輝きが、真下の僕の住む町を覆った。

「ヒイロ……。」

その様子を、能力を使いきったデュナメスがじつと見る。

と、

「——ぐ……く……そ……つたれ……！」

『「！？」』』

ルシフェルが、起き上がったのだ。

確かにトドメは刺さなかったが——早すぎないか！？

まずい——今は動けない——どうする？

「くそが……墮天使としての能力をほとんど完全に使っちゃったから大したことは出来ないが——」
にやりと、その顔がゆがむ。

「これくらいのことではできるよなあ！」

ダン、と、ルシフェルが駆けだす。

まずいますまずいます！ 刀も標もぐったりしているし、デユナメスはもう能力を使えないし、僕は今動けない――

「死ねええええ！」

その拳が振り下ろされようとした、その時――

「ちえいさー！」

誰かが、ルシフェルをぶっ飛ばした。

「まったく、こんなのがわたしの息子の敵なのかい？」

その声に、聞きおぼえがあった。――って、

「お、お婆ちゃん！？」

「緋色、久しぶりね。」

そこには、見た目も性格も若すぎる僕のお婆ちゃんなかみの姿が――って、何で背中に翼が！？

「え……お婆ちゃんって……ミカエル様が！？」

「み、ミカエル様？」

デユナメスの意外な一言が、僕の気をそぐ。おおっと、集中集中。

「――緋色、あんたも立派になったわね。あんたを見ていると、あんたの両親を思い出すよ。」

「ぼ、僕の両親？」

そういえば、お婆ちゃんが（デユナメスに「様」づけで呼ばれるほどの）天使だというなら――「もしかして――」

「そ。あんたは生粋の天使だったのよ。」

「はああああ！？」

は、話が飛び過ぎてよくわからない。

「あんたの両親――息子とその嫁と、二人とも、最後まであんたを

護ったんだから、立派だよ。」

「え？」

「なんだい、10年前のこと、思い出さなかったのか？」

10年前——やっぱりそこに話が戻るのね。

「あ、うん、その……思い出したんだけど、僕の両親が天使だっていうようなところはなかったよ？」

というか、僕は10年前にルシフル相手に気を失ったわけで……。

「そうかい、なら、話すよ。といっても、わたしの話も、とある天使を通して聞いただけなんだけどね。」

そう言って、見た目30代ほどの僕のお婆ちゃんは話し始めた。

これは、今から10年前の出来事だ。

「緋色！」

母、心が、気を失った緋色へと近づく。だが、手が届く直前に、無慈悲な男の攻撃によってそれは遮られる。

「ぶあくか、感動の再会なんてさせねーよ。」

黒い黒弾が、心に直撃する。もともと、なぶるつもりだったのだろう。この一撃を受けても、一般人の心は吹っ飛ぶだけだった。——左腕が。

「あああああっ！」

男はケラケラと笑い、心は千切れてなくなった左腕の根元を抑える。

「心！」

父、力が、左腕を失った心へと駆けよる。

「だーかーらー、感動の再会なんてさせねーつつってんだろー？」

黒弾が、力の元へと飛んでくる。

だが、力はそれをかき消した。

心の左腕は、出血がみるみる収まり、気がつけば、吹っ飛んでいっ

たはずの左腕はひつついていた。

「――相変らず、お強いねえ。力さんに心さん――いや、元熾^{セラフ}天使のお二人さん。まったく、俺とおんなじよーな待遇なのに、何であんならはこのうのうと暮らせるのかなあ？　ちよつと嫉妬しちゃうよ？」

ケラケラと笑う男の背中には、同じく6枚の翼が。

それを睨む美菜乃夫婦の背中にも、同じく6枚の翼が。

「まったくさ、折角の地位も力も使わないで、人間にあこがれて墮天して、子供まで作っちゃって、そんな子に限ってこんなに強いって、やっぱあれ？　蛙の子は蛙？　あれ、意味あっていたよね？　あってなくてもいいけどさー。」

歌でも歌うような軽いノリで、彼はさらに黒弾を放つ。

「ぐうっ！？」

「きゃあっ！」

二人にそれが命中する。地上に降りてから、もう6年たつ。――緋色は、1月生まれの早生まれだ。――たった6年だというのに、元同じ階級の天使に、二人がかりで勝てないというのか？

「そうだね、お前たちと違って、僕は闇ってやつも力にしたからね。厨二病乙く俺く。でもいいじゃん、本当なんだから。」

さらに黒弾は勢いを増す。今度は、雷のおまけつきだ。

「何が――なにが目的だ！」

力が叫ぶ。

「ん？　目的ね、簡単簡単、お前たちの抹殺だヨ。」

力も心も、声を失った。軽いノリでそんなことを言うようになるまで堕ちたのか、お前は――残念だ。

「でもねー、お前達なんかより、ずっとそっちの方が興味深いね。そっちのチビッコ。一瞬、俺もビビるような力を出すんだもん。」

そう言って、男は緋色に向けて黒弾を放つ。それを、力が辛うじて受けとめる。「ぐうっ――！」　口から空気が漏れた。

「あなた！」

「ああ！ 絶対に、息子を傷つけてなるものか！」

意地でも息子を守ろう。それが——父親っていうやつなんだと、オレは思っている。

「ふうん、息子は、ねえ——じゃあこっちはどうなってもいいよね！」

急に、黒弾を放つ方向を変えてきた。その先には——標。息子の幼馴染だ。

「あぶない！」

急いで駆け出す。「かかったね。」「！？」

標に放ったそれよりも大きな黒弾を、今度は我が息子^{緋色}へと放つ。しまった——！

くそう、息子を見殺しになんかできるか——！ だが、黒弾が速すぎて、ここからじゃ間に合わない。

その時、だ。

——あなた！ あなたは標ちゃんを！——

最愛の妻の声が聞こえた。

その時には、オレはすでに緋色の幼馴染の代わりに黒弾を受けていた。

そして、緋色の代わりに——

「こ——ころおとおおおっ！！」

最愛の妻が、黒弾を受けきった。だが、それはなまった体で受けとめきれぬほどやわな一撃じゃない。心は、緋色に被さるように膝をつき、手をついた。

「緋色——私の、息子——」

すでに彼女の能力が発動して、彼女の背中の傷を修復していく。しかし、これは怪我を直すだけで、体力は戻らない。このままでは、心は——

「あああああああああ！！！！！！！！」

大声で、男に突進する。今出せるありったけの力で、あいつの顔面をぶん殴ってやる！

だが――

「無ー駄♪ そんなになまって大丈夫か？」
あっさりと、蹴落とされる。

――バケモノめ。――

奇しくも、息子、緋色は、10年後に同じ男に対して同じ感情を抱くことになるが、そのことを彼が知る由もない。

落ちていく最中にも、男は容赦なく黒弾を当ててくる。

――勝てない。――

なら、勝たなければいい。

俺がするべきことは、簡単なことだ。バケモノに勝つことじゃない。バケモノから、護ることだ。ここにいる3人を――皆を。

俺は美菜乃力、皆の力になる男。

だんっ！

アスファルトの地面に背中から思いつきり着地して、2、3回バウンドする。だが俺は諦めない。護ってやるよ。

同じ志で、最愛の妻、心が立ち上がる。そうさ、護ってやるさ。お互いがお互いを、お互いが一人ずつ子供を守れば、ちょうど計算が合うだろ？

だが、そんな俺たちの心を打ち砕くものが、そこには広がっていた。

男の全長を超える、大きな黒弾。

「あほらし。護れるもんなら護ってみなよ。もし護れたら、俺の攻撃はこれでやめるさ。」

ああ——そうかい。それがどうした？

「あああ！」

「はっ！」

俺たちは、二人同時に光弾を放つ。

「諦めたらいい物を……。」

最後に、そうぼそりと男が呟いたのが聞こえた。そして男は、その巨大な黒弾を、放った。あっさりと、俺たちの光弾がかき消される。

「あ……あ……。」

俺は、言葉を失った。だが、心は——最愛の妻は——

「あなた——愛している。」

それだけ残して、緋色の元へと駆け寄った。

「——ははっ、最後は息子と妻から少し離れるのか——俺も、愛しているさ。」

最後くらい、息子の顔を見届けたかったが、きっとそれは無理なんだろう。

——いいさ、妻に「愛している」なんて言われて、カッコをつけたがらない夫はいないさ。最後くらい、たった一人でも、護ってやろうじゃないか。

俺は緋色の幼馴染に、心は、緋色に覆いかぶさる。こんなでっかい雨粒、俺たちが屋根になって護ってやるさ。

「——心——緋色——愛している。」

そう言って、お婆ちゃんはまだ一発、蹴りをかます。

「あんたの罰は——わたしが決めることじゃないからね、ま、どうせ今は何もできないただのガキなんだから大人しくしていな。」

「——ちっ。」

あのルシフェルを言いくるめた——さすがというべきかすごいというべきか……。

結局、僕はほとんど集中できず、町の復旧作業は何時間もかかった。

緋色とデュナメス

「長い間、世話になったな。」

「ありがとう、標。」

そう言い残して、刀の中にいた天使、エクシア・ソニアと、標の中にいた天使、ネハシム・ラファエルは、半透明な身体となって飛び去ってしまった。

「また会えるといいな。」

「そうだね。」

刀と標の願いは、はたして叶うのだろうか——それは誰にもわからない、が、きっとかなうんじゃないかと、僕は思う。

そんなわけで——どんなわけで？——

今日も今日とて月曜日、学校ですよ奥さん。

あの後、やってきたアンジェラ達のおかげで僕らは地上に帰ってきて、その後——いろいろあったなあ。

「姉上、そっちはどうだ？」

「異常なしよー。——まったく、罰だって言うからどんなものかと思っただら——」

彼女達は今、天界の牢獄の最下層にいる。ただし、彼女達がいるのは牢の外だ。

ならなぜこんなところにいるか？

なぜなら、それが天界側が彼女たちに出した『罰』だからである。

その内容というのが——

「なーハルトマルトー、なんか面白い話ないー？」

ルシフェル

「まったく……罰がまさかこいつの御守だったとはね。」

そう、牢の中にいるのは、力を失ったルシフェル。

いつ変な気を起こすかもわからないこの男の見張りが、彼女たちに与えられた罰である。

「(ま、こんな奴の御守ってんなら、確かに罰になるけどさ……。)」

大した事がなかったのに、なぜか釈然としないマルトであった。

「わたしはまた旅に出る！」

と、お婆ちゃんこと熾天使ミカエルさんは、天使特有の『若い時間が長い』ことを利用して、もう一度旅に出かけてしまった。まったく、あのお婆ちゃんは……。

次に帰ってきたときには、なんか作ってあげよっかな？

デユナメス部隊は——デユナメスが力を失ったことで、アンジェラがリーダーになったんだっけ？

その際にアンジェロが『ぜ、ぜひ私をお姉さまの部隊に！』ってものすごい顔で言いよってたっけ。

——そうだよ、そのデユナメスだよ。

あのあと、彼女はどこかへ行ってしまった。

起きても、彼女はいなかった。

家は、再び静かになった。

ああ——改めてみたら、物凄くこの家広かったんだね。

「緋色く？」

「うあ!？」

考え事をしているうちにぼーっとしていたようだ。標がのぞきこむ。

「——緋色。好きだよ。」

なんて告白されて、意識しないわけにもいかず、僕はどぎまぎしているというのに、標はまったくそんなそぶりを見せない。

「なんか考え事していたでしょ。」

「え、あ、う、うん。」

「それも、デユナメスさんのこと。」

うわ、ドンピシャだ。なんでこういうのってみんな鋭いの？

「それよりさ、昨日の私のあれ、返事まだ？」

「うゝ……。」

「なによ『うゝ……』って、傷つくなあ。」

「あ、ごめん。」

「あれとは？」

隣から、刀がひょっこり現れる。

刀が同棲しはじめたときから、彼女と学校に行くのが『たまに』から『いつも』にランクアップし、どうやらそれはまだ続けるつもりらしい。

「あ、え、えゝっとね……。」

なんで僕、こんな状況に？ おい告白した本人、なににやにやこつち見てんだ。

「……ふむ。大体察しはついた。」

女ってすげえ。

改めて、僕はそう思った。いや、刀だからこれだけ鋭いのか？

「――それを踏まえて、あえて言わせてもらおう。」

「え？」

ナ、ナニヲデスカ？ ナンダカ、スゴクドギマギナヨカンガ？

「緋色、好きだ。」

なんだか語尾に『（キリッ』とか付きそうな顔だなあ。もうちょつと恥じらってもいいものを。

というか、これなんてギャルゲ？

「え、あ、えーっと……。」

ちらりと標の方を見してみる。うわあ、ばっちり刀の方を見ているよ。ちらりと刀の方を見してみる。うわあ、ばっちり目があったよ。

どうしよう、これってどうするべき？ 教えてエロい人。じゃなくって偉い人。エロい人に聞いたら大変なことになりそうだ。

「え、えっとね、ちよっと待った。二人とも、なんで僕なの？」

告白されたらまず知りたいこと第一位（当社比）を、僕はズバリ聞いてみる。

「なんで、ねえ……。」

「ふむ……改めて聞かれると難しいな。」

あ、そういうもののなの？

ちよっとがっかりしたような、そんな気分で、ふと時計を見る。

7..41

このままだと、遅刻だ。

「うあああああ！？」

「ちょ、緋色！？」

全力疾走。男は疾走。とにかくダッシュ！ なんか今はそんな気分。

「ま、まだ答えを聞いていないぞ！？」

「出来れば時間をくださいー！」

いや、マヂで。

なんとか電車に乗り込んだが、何というかものすごく気まずい。こんなときは寝るに限るや。うん。

——なんて思えど、疲れているのに眠れやしない。

「——そういえばさ、緋色。」

「ん？」

「創造^{アトム}のちからは……もう……。」

ああ、そのことか。

「うん。……でも、いいじゃん。これで僕は名前通り、子供のころの夢をかなえたんだから。」

みんなのヒーロー

まさか、10年以上前の子供の夢を叶えるとは思っていなかった。こうして、僕の住む町は確かに、僕の手によって救われた。でも、そのことをわざわざ公言してどうなる？

ただの厨二病だと思うだろ？　じゃあ、言わないよ。

「そっか……もう能力は、使えないんだ。」

「ま、ちょっと残念だね。」

でも、それでいいさ。

少なくとも、僕はそう思っている。

そんなこんなで、今日も今日とて学校は過ぎていった。

昨日はいろいろありすぎて、ほとんどの授業の記憶があいまいだ。きつと、熟睡してしまったのだろう。

どうってことない一日がその日も過ぎた。

目の前で電車が出ていったせいで次の電車を待つはめになったが、別にだからと問題ではない。急いで帰る理由なんてない。どうせ家に帰っても一人なんだから。

——そう、一人、なんだから。

学校には、まだデュナメスの机が残っていた。表向きではまだ休みらしい。

これがいつ『引越し』とか『転校』とかになるだろうか——考えて、

少しさびしくなる。

なんて。

——家に着いて、見慣れないものが玄関前（外）にいている時
まで、本当に今日も平和に終わるものだと思ひもしなかつたのだが。

「……はは……なんだこれ。」苦笑しながら、ダンボールを見つめ
る。

それはダンボール。いや、見ただけでそれは分かる。問題は、これ
の中見なわけで。

がっちりとかムテープで封をされていて、側面には『割レ物注意』
と。そして差出人不明。なにせ、差出人が判るようなものが一切な
いのだから。普通こういう荷物って、相手先（この場合、僕の家）
の住所とか書いた紙が張っているだろうけれど、どうにもそういう
た類のものはない。はられていた形跡もない。ただ一枚、ひっそり
と『緋色殿へ』と書かれた小さな紙がムテープ本体を重しにそこ
においていた。察するに、この荷物はここでムテープの封がされ
たのだろう。

——なかみが、容易に予想できる。

さて、今回も居間に運ぼうか。

あれだけ鍛えても、そのほとんどは創造アトムによるものだったらしく、
その重たい段ボールを運ぶ足取りは不安定だった。いたっ、肘打っ
た。

その衝撃でよたつき、ダンボールが角にぶつかる。「いたっ!？」

——はは、なんだこりゃ。まるで、あの日と同じ——

よたよたと、居間にたどり着く。そして僕は、力いっぱいムテー
プを引っ張る。ビリビリビリッ! 相変わらずの粘着力御苦労さま。
そして、だ。

ムテープを引きちぎると同時、ダンボールから女の子がものすご

い勢いで飛びついてきた。が、どうやら僕の位置が悪かったのか――今回は間違いない僕的位置が悪かったのだろう。――思いつき頭をぶつける。

『――っ！――！――！』

二人同時に同じような体制でうずくまり額に手を当てる。ファーストコンタクトと同じとは、とことんあれだな。

「痛いじゃないヒロ！」

「ごめんごめん、デユナメス。」

そこにいたのは、金髪碧眼の美少女。なぜだろう、彼女の顔を見た途端、安心感が――

「昨日の今日で戻ってくるとはね。」

「仕方ないでしょ？ 解放^{エデン}を失って、アタシの居場所はもうここしかないって――」

「そっか、うん。またあえてうれしいよ。」

「でしょ？」

あんまり調子に乗るなよ？ 僕は笑いながら彼女にそういった。

「――本当に、嬉しいよ。貴方は、アタシを受け入れてくれるから。」

「当然だろ？ だって、昔そう約束したじゃないか。」

そっと一息吸って、

「『僕の名前は美菜乃緋色、みんなのヒーローになる男だ！ そのみんなの中に、お前も入れてやる！』ってね。」

苦笑しながら、僕はつぶやいた。

「思い出すのが遅いわよ。」

そうぼやきながら、彼女は目に涙を浮かべて、笑いながら僕に抱きついてきた。

もう一度、僕は苦笑した。

でも、主人公っていうのもあるんですけど、結構この名前は好きですね。

ちなみに、このキャラの名前はずいぶん前に『どう考えてもバッドエンドな漫画』に勝手に介入して脳内でなんとかする役でしたw
脳内妄想乙w

で、その時の一人称は『俺』で、身長とかも微妙に今より高くて、正義感の塊みたいなやつでした。一番最後は——今の緋色にも当てはまるのか？

後裏設定ですが、緋色の名前の由来として『生まれたばかりの時に真赤だったから』っていうのもあります。

デユナメスⅡノーブル・ヴァーチェス

デユナメスとヴァーチェスは、作中にあるように力天使から。ノーブルは『高潔』って意味の単語から。デユナメスら力天使の名前の意味も同じですので、直訳すると高潔Ⅱ高潔・高潔……今気付いたw
これはひどいw

そんな彼女の階級は座天使——オイオイ。
スローネ

そして名前だけでどれほど私が00に影響を受けたかが読み取れる一人でもありますw

言うまでもなく、彼女は緋色にべたばれです。

身長は164？、バストはCくらい。

みぢしるべ
道標

まんま道標。現実にも5月でもニット帽かぶっている学生服の美少女なんていたら道標にできそうですねw

ほんととはツンデレとかにするべきだったんでしょうけれど、実は私、ツンデレキャラが書きません（おい！？

なので今に至ります。こんなのでいいのか？

最後の告白も、なんか急展開であれだし……もうちょっと考えればよかった。ゴメソ標。

身長は160?、バストはギリギリBかな?

ネハシム・ラファエル

標の中の天使で、銃撃のプロ。でもやってることはどこぞのサバーニ〇。乱れ撃つぜえ!

半透明なうえに浮いていたために正確な身長データなし。胸は結構デカイっぽい。

美琴 みこと 刀 かたな

名前の由来は彼女の主な服装と武装である『巫女』と『刀』……こんな名前ばっかだな。

彼女も彼女で緋色に告白するし……そこらへんの心情をもっと細かく書こうかと思ったけれど、やりすぎるとデユナメスが今以上に空気に……だから、ね?

身長は165?、バストはA。小さいほうが好きです。ナニとは言いません。

エクシア・ソニア

刀の中の天使で、剣術の達人。でもあっさりアザゼルに操られた。不意打ちを食らったからであって、決して彼女は弱くありません。半透明なうえに浮いていたために正確な身長データなし。胸は少々残念っぽい。

ルシフェル・イブリース

本作のラスボスで、緋色の両親の敵。彼の手にかかれば、自然災害なんてお茶の子さいさい……なんですが、戦いの舞台が雲より高いところだったので、大したことはせず。それでも、彼の使う技はすべて強力無比。ただし創造アトムを除く。

かなり子供っぽいというか、基本的に遊んでいます。

アンジェラ アンジェロ

姉妹。妹は危ない人ともい天使W 二人とも弓の達人で、階級に比べて戦果はなかなかのもの。アンジェラはデユナメス部隊の指揮たいちょうですが、アンジェロはまったく関係ありません。まったく違う部隊の部員です。

二人揃って身長は167?、バストはCとD

ハルト マルト

同じく姉妹ですが、特に危ない関係ではない様子。チツ（え ハルトは標と、マルトは刀と同じ能力です。ですが、武器が違うためあそこまで違ってきているんです。

ハルトもマルトも身長は177?、バストはBとC

ハルトマルト

美菜乃夫婦

緋色の両親。父が力で母が心。能力名も、名前と同じで父が力、母が心。ラファエルそう、標と刀の天使の名前と同じです。

名前に関しては言うまでもなく。

人間にあこがれて墮天して、6年後にルシフェルに殺されて——カワイソス。

美菜乃お婆ちゃん（ミカエル）

まさかのお婆ちゃんW ちなみに作中で言われている通り、彼女は見た目も性格もかなり若いです。なかみ天使の頃の名前がミカエルで、美菜乃夫婦をおっかけてきました。が、彼女は墮天しておらず、お偉いさんに顔パスできる人ですW

下の名前? 真理亜でいいや。

——書いてみて、いかに自分が適当投げやり人間か分かりました。それによく読むとこの作品、なんかこの駄作者の最近読んだ作品の

影響が現れまくりな気が……？

うーん……まだまだ修行不足です。

さて、そろそろ合いですか？　たいしたこと書いてないけどいいよね。

最後に、この作品を読んでくださった皆様、アイデアを真面目にきいてくれた友人、その他いろんな人に、ありがとうございます！
では、ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8716q/>

どうやら僕は僕の記憶のないうちにお姫様のヒーローになる約束を交わしてい

2011年10月6日21時55分発行